

棲

神

山梨縣身延山  
祖山學院同窓會

文  
學  
部

對

喻

廬山學約同議會

山樸練良淑山

文學語

# 棲神

## 目次

□ 卷頭言……………	高田惠忍……………	一
□ 日蓮上人の見たる佛教史觀……………	塩田義遜……………	三
□ 吾祖と三階佛法……………	九山顓孝……………	三
□ 佛子の進むべき大道……………	近藤惠聰……………	三
□ 宗教現象に對する考察……………	矢野鍊明……………	三
□ 眞の宗教への道……………	方哲源……………	三
□ 民衆の宗教化……………	中屋教海……………	三
□ 亞細亞の目ざめ……………	矢谷智秀……………	三
□ 明るい世界へ……………	竹多快照……………	三
□ 宗教的生命の深さ……………	福山一步……………	三
□ 微笑……………	三木淨達……………	三
□ 身延の自然……………	石井綠線……………	三
□ 聖祖御入山を懷ふ……………	間宮夢覺……………	三
□ 思ひのまゝに……………	三木淨達……………	三
□ 本妙律師を慕ひて……………	吉田碧洞……………	三
□ 七面山へ……………	吉田碧洞……………	三

□ 天理を訪れて……………	矢野 鍊明……………	空
□ 鮮支旅行の記……………	方 哲 源……………	古
□ 近況十首……………	黒崎與志雄……………	克
□ 涙の光……………	吉田 孝秀……………	八〇
□ 除夜の鐘……………	矢野 鍊明……………	八三
□ 感謝……………	福士 泰量……………	八五
□ 短歌……………	石井 綠 線……………	八六
□ テニスシテ……………	步 牛 生……………	八七
□ 弱きものの嘆き……………	黒崎與志雄……………	八九
□ 天上と下界……………	橋 爪 要……………	九三
□ 或る男と信仰の巡査……………	木村 鍊 戒……………	九三
□ 佛様と道すがら……………	田代 靜 山……………	九七
□ 編輯後記……………		一〇一
□ 同窓會會報……………		一〇一
□ 庶務部報……………		一〇一
□ 辯論部報……………		一〇三
□ 運動部報……………		一〇三
□ 文學部報……………		一〇五

# 思想善導

A 思想善導とは一体どういふことでせう。

B 新來の西洋的の共產主義とか、ボルシェビキーといった過激思想が元になつて、共產黨事件のやうな忌まはしいことが起つたので、そこで左傾思想を防止するとか、思想善導とかいふことが起つて來たのだと想ふ。

A 思想善導には何か警察權とか、警察力とかいふものが加はつてゐるやうに想ふが如何です。

B さうだ共產黨事件の勃發が動機で思想善導といふことがいひ出されたから、思想善導と警察力と何か直接關係があるやうにも見ゆるが、一体思想を取締るに警察力を以てするといふことは元より徹底せぬことで、それは唯一時の方便なり、過程なりにすぎないだらう。矢張思想は思想を以て善導するより外に道はないでせう。

A 然らば時代思想を善導するに如何なる思想を以てすべきや。

B 時代思想を善導するには、どうしても一步時代より高き地歩を占むる高次的思想を以てすべきだ

と想ふ。

A それはどういふ思想です？

B それこそ吾日蓮聖人の獨創法華經本門「我實成佛」の釋尊の久遠實成を説ける下の文底の秘奧本覺法門に之かずと想ふ。

A その本覺法門とはどういふのです。

B 一言にして、先天本有に、宇宙、國際、國家、社會、個人は一切が、絶對人格、壽量文底の無始

本佛といふ絶對無限尊の育み、大慈愍を受けて本來救はれてをる「時<sup>三</sup>我<sup>(無始本佛)</sup>及衆僧<sup>(無始九界)</sup>俱<sup>三</sup>

出<sup>三</sup>靈鷲山<sup>(即ち是也)</sup>」の自覺に發足することがその教の出發點で、それから以後の因果はこの

本佛に對する感激の淺深のみ。之を本覺果上の因果即ち從果向因の義とする。かゝる本覺門の庭の感激にして初めて信仰の最高價值を許し得る。かゝる本覺門の園に咲ける四恩の花にして、初めて報恩道の道德の最高價值を許し得る。

無始本佛先天本有の無限の大悲と救濟に目さめての感激報恩の前には、普通の相對的なる信仰論道德論は、大海の前の百川のみ。げに本覺門の信仰道德は百川を朝宗せしめてなほ餘りある大海の如き絶對の一道であらねばならぬ。

A さすれば時代思想善導には、偏に日蓮聖人の本覺門の信仰道德に限るといふのですネ。然らばそ

の修行法如何。

B 日蓮聖人の行法は信を措いて外にはない。信即行で、本覺の自覺、法悅、感激それが信であり、又行である。然して之を正しく口業に顯す、それが本佛所與の本法題目を不惜身命に唱ふることである。

A 一体題目とは何です？

B それは先天本有に、宇宙、國際、國家、社會、個人を救濟すべく已むに已まれずとする無始本佛の願行の結晶であつて、本佛の大智惠光明と本佛の大慈悲雨露の二つに盡きてをる。然して之を唱ふる所に本有の救濟の自覺と共に、絶大の感激の涙が塗涌し來るであらう。

「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を讓與へ給ふ」

「本覺の家には成佛の語なし」

「日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱ふる者は與如來共宿の者也」

かゝる絶大の感激の涙の迸る所に左傾思想何の顔せありや、共產主義何の偉力がある、ボルシエピキ―果して何ぞや。

思想善導の日本刻下社會の全面に叫ばるゝ時、吾人はその最高の救濟手唯吾家のニチレニズムの

A 生粹本覺法門にありの警鐘を亂打するに躊躇せぬ。然り何の躊躇する所があらうぞ。  
や、ありがたう、御かげで眞の意味の思想善導が飲み込めたやうです。

B .....法悦感激の表現にて幕。





## 日蓮聖人の見たる 佛教史觀

高 田 惠 忍

開目鈔、本尊鈔、撰時鈔、報恩鈔等を中心とし、有ゆる祖書に顯れたる所を綜合して聖人の佛教史觀を考察するに、聖人の頭にはたしかに傍系佛教史と正系佛教史といふ二つの史觀が存したことを肯き得る。傍系佛教史とは非法華經中心の佛教史で、今日行はれつゝある三國佛教發達史が方にそれだ。正系佛教史とは法華經中心の佛教史で、この中にも正と閏とが立つ。閏とは光宅、嘉祥、慈恩、一行聖德太子(光宅に依る故)、慈覺、智証、安然、惠心、檀那その他各宗高僧の扱へる法華經觀の歴史がそれだ。正とはその純粹に約して釋尊、天台、傳教、日蓮の次第なる三國四師の法華傳燈史がその一、更に一部唯迹の迹化天台傳教の法華觀より、一部唯本本化日蓮の法華經觀の如何に法華の中心生命に飛躍せるかを示す方面の超歴史的なる本佛釋尊、本化上行、日蓮の次第に立つ法華傳燈史がその二だ。普通前者を吾祖外相承の次第、后者を内相承の次第、前者を歴史的、后者を超歴史的と見てをる。前者の

外相承を更に敷衍すれば、印度に於て龍樹、天親、支那に於て法華傳譯の羅什三藏を加ふべきが如し以上の如き傍系佛教史と正系佛教史の二つの史觀が頭に存して、是に於て本門立脚の法華經觀、本化獨特の題目宗の宣揚と共に、對佛教諸宗の横縦の批判として顯れし、それが日蓮宗學といふものである。殆ど吾祖と同時代の佛教學者なる凝然の如きは靜的なる純佛教史家なるに對して、吾聖人はさすがに本門立脚の信に立つ白熱の法華經行者なるだけに、その史觀に於て當然傍系と正系と二つの史觀ありし事を豫想せずには聖人の對諸宗批判の教義は解釋し難いのである。

傍系佛教史と正系佛教史の差異は、法華經に對して相對價値の見解に立つか、絶對價値の見解に立つかに依て別れる。從て傍系佛教史とは一般の三國佛教發達史の謂ひ、正系佛教史とは三國の法華傳燈史の謂ひである。中に於ても閩の傳燈史は法華に對し相對價値の見解に立つから、攝して傍系佛教史に屬し、今は法華に對し絶對價値の見解に立つ三國に於ける正の法華傳燈史を意味する。五大部中心の祖書全篇に二つの史觀の材料はたしかにある、然し前者の存在は后者の爲めの存在のみ。聖人の史觀の中心は后者に存する。然らば閩を去れる眞の正系佛教史觀何ぞや。それは佛滅後の區分を以て大悲經、善見律等の指示に基き正像末の三時に別ち、又大集經の指示に依り右の三時を更に五ヶの五百歲に別ち、法華經藥王品の后五百歲廣宣流布の文を有意義ならしむる見方の佛教史觀である。既にいへる如く正系佛教史觀とは法華經に對し絶對價値を認むる見方である。然して法華經の内容は前權

后實、開權顯實、開迹顯本がその内容である。といふことは法華一部の中、迹門は昔迹相對、本門は迹本相對であつて、法華一部は要するに昔迹本三重の次第を明にするものである。

經典の成立研究に没頭する史的研究の立場から、天台の五時判を免や角いふことが今の流行のやうである。然るに法華以外の諸經と法華經との必然的關係を明にし、前權后實、開權顯實、開迹顯本といふことが三世諸佛說法の通規なりとして、法華經を一切諸經と關係づけて所有經典の最後の結論の位地に置くべく開展された、あの五時八教判の有ゆる教判中の最優の教判とあり、從て后世佛敎史上に與へたる影響も又最第一なるに於て、天台の眼識の非凡に對して驚歎すべきは自他の共許する所である。史的研究の立場の外に敎權的或は理想的、研究の立場を豫想し來る時、天台の見方は依然として一方の權威であらねばならぬ。吾聖人の正系佛敎史觀は天台と全然立場を同うして迹本の區別を究盡せる点に於て、天台より百尺竿頭に一步を進めしものだ。

在世の佛敎は要するに昔迹本の關係に過ぎない。蓋し華嚴、阿含、方等、般若の諸經は、小乗若くは權大乘であつて、機根未熟の爲めに且く爲實施權せしに過ぎぬ、已に四味三敎を開出して彼等を誘掖開導して今正に法華の眞實を開示すべき時至り、前の爲實施權を收めて開權顯實し來る、それが實相論、佛性論を開示せる法華經迹門の所説である。故に迹門は方に昔迹相對といふべきだ。更に本門は佛陀の本地を説き、今番の釋迦は勿論、有ゆる佛々例へは彌陀、藥師、大日、大佛等、要するに壽

量本佛の本に對すれば垂迹のみと喝破した。即ち本門の開迹顯本は方に迹本相對といふべきだ。かやうに見て來ると、在世の佛教一代五十年の所説、要するに昔迹本三重の次第のみ。然してこの三重の次第それが法華迹本二大教義の骨旨を爲す。然り而して滅后三時の佛教史、亦實に昔迹本三重の次第にすぎぬと見る、それが吾聖人の正系佛教史觀といふものだ。

蓋し正法 佛教とは大集經に依るに、第一の五百歳を解脱堅固(意)の時、第二の五百歳を禪定堅固の時として、共に昔の小乘權大乘流布の時と見るのである。印度に於ては小乘二十部の分裂、乃至六百年の馬鳴、七百年の龍樹、九百年の世親無著の時代より那爛陀教學の時代が正しくそれだ。次に像法佛教とは第三の五百歳を多聞堅固の時とし、支那に入て六朝時の傳譯佛教より、光宅等を中心とせる南三北七の諸派を経て、その中心を陳隋二朝の天台大師とするのである。法華經迹門に立つ一部唯迹の法華觀を迹と名づける。是れ迹の教義として滅后に顯れし第一次である。支那の佛教史は要するに天台中心の佛教經典傳譯若くは佛教々判の歴史に外ならぬ。支那の佛教史から天台大師を取りさる事は、日本の佛教史から叡山佛教を取り除いたやうなものだ。天台大師中心の羅什、玄奘であり、賢首、嘉祥、慈恩、三三藏、達磨、善導、道宣等であらねばならぬ。更に同じく像法にして、第四の五百歳を多造塔寺堅固の時とする。その中心を平安朝劈頭の傳教大師となす。傳教の佛教を以て圓、密、禪、戒の四宗相傳といふが、密禪の二は後の附會多きにをり、その重要著書から見て、その要部をば圓、

戒の二とすべきである。圓とは天台と同じく主として一部唯迹の法華の謂ひ、戒とは天台の圓定圓慧を弘めしに對し、法華の中心教義に梵網經の十重禁戒を加味せる正依法華傍依梵網の圓頓戒に外ならぬ。かく天台以上に圓戒を發揮せしも、その教理は依然として迹を出でぬ。然してその日蓮聖人出現以前日本佛教史上中心の位地にあることは、支那佛教史上の天台の位地に變らぬ。聖徳太子が日本佛教の母たるはいふまでもないが、傳教の法華中心に立つは元より太子と共鳴する所なるべく、その大きさに於て、太子以後の第一人なるべく、奈良の六宗も、弘法の眞言も要するにその前驅と后殿にすぎない。叡山佛教から覺、証、然、惠、檀二流を出し、良忍、空也を出し、法然、榮西、道元、親鸞日蓮を出せるに見る、日本佛教の搖籃それが叡岳でなくて何であらう。その源頭に立つが實に傳教だその偉大以て諒すべきではないか。

次に末法佛教とは第五の五百歳を以て鬪諍堅固、白法隱没の時とする末世の佛教をいふ。蓋し大集經の意は、小乘、權大乘の隱没を豫言せしのみ。法華經藥王品には后五百歳廣宣流布とある。是れ正しく吾日蓮聖人の流布すべき一部唯本の法華經題目宗の流布に就て佛陀の豫言せしもの、諫曉八幡鈔の日は東より出て西を照す、日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相といひ、取要鈔の一天四海皆歸妙法といふ、方に此謂のみ。天台の后五百歳遠沾妙道といひ、荆溪の末法の初め冥利無きに非ずといひ、傳教の末法甚た近きにあり等は、傳教のは本化を豫言せしと見るべく、天台荆溪は共に法華經流布を通

漫に暢べてをるのであるから、自ら中に本化の聖教を含むわけである。吾日蓮聖人が末法に入て一百七十二年にして出世せられし使命は、迹門に立脚する天台傳教に依て最高の教理たるを証せられし法華觀より進一步、本門佛陀論を高くかゝげてこの本佛に迹佛の有ゆる佛々を統一せしめたる本佛釋尊をかゝげて、これに絶對歸命をさゝげる信心の究竟に依て、自己完成を期すこと即ち觀成を將來せしめ得る理想を題目五字に打こめしが本門の題目、絶對の本佛に没頭することに依て、やがて我が本佛体内に攝取せられて自我完成にまで進みくゝて、その絶頂を極めし時、本佛及本佛緣起の本尊がそのまゝ自我及自我開展の本尊となるべく、その理想の表現、それが十界大曼荼羅なる本門の本尊なることを説きしが、事一念三千觀信即觀の義である。是が即ち天台傳教の迹の教義に對して、吾聖人のを本<sup>●</sup>の教義とする所以である。事實吾聖人の法華本門立脚題目宗の信即觀の教義に於て法然、親鸞、榮西、道元等の着眼せし端的の教旨、絶對信心の教義が盡く網羅されるのである。

是の如く三國の佛敎發達史に於て、正法の中心を昔<sup>●</sup>像法の中心を迹<sup>●</sup>、末法の中心を本<sup>●</sup>となす、昔迹本三重次第の佛敎史こそ、實に三國佛敎史の根幹をなす正系佛敎史と見る。それが吾聖人の佛敎史觀の中心である。その他の變遷史は要するにこの正系史の外延をなす傍系史にすぎない。かやうに吾聖人の佛敎史觀にはたしかに傍系史と正系史の二つの史觀の儼存することは又疑ない。見來れば日蓮宗學の底邊の博きは佛敎各宗第一に位する。何となれば昔迹本の三重次第に於て、吾聖人は三國佛敎史上

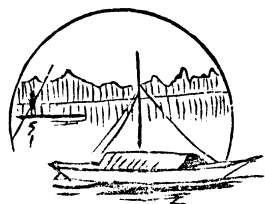
最後の結論を與ふべき大自信を以て臨まれたからである。従て昔迹本三重の次第を三國の佛教史上に宣明するは勿論、その外延の佛教史としての傍系佛教史にも審かならざれば、蓋し中心佛教としての正系を知るに由ない。又三重の次第は縦の問題のみでなく、横にも三重批判で進まねばならぬ。といふことは迹本相對に於て台當の區別を、特に迹化と本化の使命を明にせなければならぬ。又内容的には彼の觀心宗に對して、私の以信代慧宗、信即觀宗たることを明にすべきだ。更に昔迹相對、昔迹本相對に於て、完全に縱横に諸宗を批判すべきである。四ヶ格言の絶對折伏主義もこの義邊に屬する。要するに縦に約しても、横に約しても三重の次第でゆく、それが法華經そのものだ、かくて日蓮宗學の對象は對他的には佛教諸家學といふことになる。以て底邊の如何に最廣なるかを了すべきである。

以上日蓮聖人の三國佛教史に對する二つの史觀の概説を試みた次第である。

維時昭和三年九月二日、祖山にて、法のみ庭に漂ふ木犀の

香をかぎつく稿了。





## 吾祖と三階佛法

鹽田義遜

三階佛法とは三階教又は三階法ともいひ、隋の天台智顛（AD.538—597）と、同時代に出でた信行禪師（AD.540—597）に依て、唱へられた所謂末法佛教の先驅である。三階佛法に就ては、先年學界を驚歎せしめた、矢吹博士の「三階教之研究」に餘蘊なく述べられて居るから、此には唯今の「吾祖と三階佛法」を述ぶるに當つて、必要なる三階教の概念を述べて、進んで吾祖との關係に及びたい。

信行の傳は隋の費長房（597）の「歷代三寶記」十二、並に唐の道宣（645）の「續高僧傳」十六等に收められ、近くは「三階教之研究」の最初に、「教祖信行禪師傳」並に「信行碑考」に詳である。信行は魏州衛國の人で、梁の大同六年（540）を以て生れ、隋の開皇十四年（594）正月四日五十五歳にして寂した。末法佛教の先驅者であつた。天台の智顛、淨影の慧遠、三論の嘉祥を始め、華嚴の杜順、淨土の



道綽、禪の慧可等孰れも同時代で、時恰も支那佛教の高潮時代に屬した。且つ我國佛教傳來の欽明帝十三年(542)は、信行十二歳の時であつた。

## 二

信行の誕生は、その母久しく子なき故に、之を佛に祈誓し、その結果信行を得たと傳へる。「續高僧傳」にはその幼時を述べて

性殊恒雅至四歲、路見牛車沒泥牽引、因悲泣不止要轉乃離……

生知平分不憚愛憎、八歲既臨、標據清敏懷慧奇拔(正藏50-559)

といへば、其の非凡なるを知るべく、長ずるに及んで、自ら具足戒を棄捨し、體驗を重んじ親しく勞役を執り、大僧の下沙彌の上に居して、常に頭陀乞食し、日に止だ一食を執り、且つ法華の常不輕菩薩に法り、その路を行くに男女を問はず、老若貴賤を隔てず、禮拜讚歎したのであつた。ために時人その徳を慕ひ、歸依追隨するもの甚だ多かつた。これ寔に道宣が「高僧傳」に

及履道弘護識悟倫通、博涉經論情理遐舉。以時勸教、以病驗人。

蓋獨見之明、顯高蹈之跡、先舊義解翻對不同。(全上)

と記せる如く、彼は當時の佛教の常習を超越して、獨自の見地に立ちて、今や末法澆季の時となして民族的佛教在家佛教を鼓吹した。

佛滅千年後の信行をして、斯くあらしめたのは、實に彼が末法思想の確信に外ならなかつた。斯くて彼は遂に一切經中に於て、時機相應の佛教を主張し、「對根起行之法」三十余卷「三階佛法」四卷等を出して、一種の教外別傳と稱すべき、普法を唱へ、普眞の路を啓き、生盲の眼目を開き、五十五歳にして眞寂寺に於て入寂した。「續僧傳」五十四歳に作るも、碑文等に依て五十五と改むべきである。

### 三

彼に従へば摩耶經大集經等に依て、文當義當の判を以て、佛滅一千年以後を以て末法法滅とし、當時は一切の聖人、利根眞善正見の凡夫なく、唯破戒利根空有見の衆生のみなれば、佛教に於て三階の別を立て、就中第一第二階の一乘三乗の機でなく、當今末世の衆生は唯第三階の普法に依てのみ、解脱を得べしと主張した。

斯の如く三階佛法とは、第一階を一乗教、第二階を三乗教、第三階を普法又は普教といつて、是を教と時と處と人即ち機とに配して、第三階の普法を以て末法佛教としたのである。若し時に就て見れば佛後最初の五百年は一切大純の衆生、第二の五百年は一切坐禪の衆生、即ち佛後千年間は一切利根眞善正見成就の聖人の、佛教修行時代である。然るに千年以後は末法五濁で、聖人なく、一切空見有見破戒の衆生のみなる故に、第三階の普法に依らねば解脱はないのである。

若し處に就ても同様で、諸佛の淨土には第一階の一乗を説くべきも、穢土に於ては一乗に於て、三

乗と分別して説かねばならぬし、更に戒見まで破する穢土に於ては、第三階の普法に依らねばならぬ。又人即ち機に就ては、最上利根の人には、華嚴法華等の一乗教を説くべきも、若し利根正見の三乗の人には、第二階の三乗教を説き、正見戒見俱に破する、顛倒の衆生を第三階普法の機とするのである。

## 四

斯の如く時と處と人との上から見て、佛後千歳後の娑婆世界は、時は末法に屬し、處は穢土だから斷じて第一第二階の人なく、戒見俱破の惡業の衆生のみだから、第三階の普法ならざるべからずといふのが、三階佛法の根本主張である。

然らば第三階の普法とは何ぞといふに、普法とは普眞普正の佛法の意で、末法第三階の機は利根なるも戒見俱破の人であるから、一乗及び三乗の教に對して、高下淺深是非を論せず、普偏妥當即ち普眞普正の見をなすばかりでなく、諸の賢聖並に一切の凡夫に對して、勝劣優劣の見をなさぬをいふのである。即ち法華、華嚴、涅槃等の諸經は、第一第二階の正見具足の人に對すれば、別眞別正の教法で、正見具足の時處の人には、之を修行することに依て解脱を得るが、若し第三階邪見の人に於ては三乘一乗の偏執を生じ、愛憎の念を起して、三寶を毀損し、謗法の重罪を犯し、永く生死に沈淪する故に、我等末法穢土邪惡の人は、第三階の普法を以てのみ得脱すと説くのである。

願ふに信行は所謂第三階の普法を唱へて、法華常不輕の轍を踏み一切の有情を禮拜し、自ら僧行を

捨て、非僧非沙彌非俗吾祖の所謂「忝居士」(忘持經事<sup>六三</sup>)となつて、第三階の佛法を唱導したのであつた。故に當時その會下を集るもの三百余人、河東の裴玄證、化度寺の僧邑、北明寺の慧了、慈門寺の本濟、孝慈、慈悲寺の神肪等はその上首であつた。

## 五

翻つて當時の教界は、恰も南三北七等の諸家、各々その教判をかざして、蘭菊その美を競ひ、他義を貶し自流を褒め、徒らに形式に走り、彼此の是非を諍論するのみで、宗教的實踐の見るべきものは無かつた。此に於てか信行は、佛教の根本精神に立ち、時弊を救はんがために、普眞普正の普法を以て立つたのであつた。斯の如く信行の主張は、時弊を救済する所以の、眞心に外ならなかつたが、三階教の興隆は、當時の三論、天台、華嚴等の教學と相容れず、ために政府並に一部の佛教徒より、屢々迫害を蒙り、信行寂後七年即ち開皇二十年(600)隋の文帝の禁斷を初めとして、武周の則天武后の兩度(695、699)の擯片、並に玄宗の禁斷(725)に遇つたが、孰れの宗教も有する如く、迫害に依て愈々教光を發揮し、民族的宗教として諸宗の間に、陰然たる勢力をなすに至つたのである。且つその末流は遠く唐宋初に及び、その史料に乏しいが、三百年乃至四百年の歴史を有するのである。

斯くて支那佛教史上、正しく三階教に對抗したものは、奇怪にも華嚴天台等の如き一乘宗ではなくて、その教義に於て、將又内容形式に於て最も類似した、淨土系統にありしことは、珍とするに價す

るのである。即ち慈恩の「西方要決」、懷感の「淨土群疑論」、道鏡の「念佛觀」等これである。就中懷感の「群疑論」は、逆謗取捨、三昧成不、普別正否、經道滅盡、念佛救不等の數十項に涉り、その攻撃徹に入り細を穿てるもといふべきである。

## 六

信行は一乘隆盛の時に當つて、獨り諸經無益を主張せし故であらうか、當時の高僧中に於て、その毀譽の懸隔信行の如きは未だ見ぬのである。即ち碑文にはその徳を讚して、「慈悲勝<sub>ニ</sub>於釋迦<sub>一</sub>、智慧過<sub>ニ</sub>無量壽<sub>一</sub>」といひ、又その教法を歎じては「優曇可<sub>レ</sub>逢斯實觀<sub>レ</sub>遇」と、尊信斯の如きあるかといへば、墮獄蛇身を以て誹議し、貶斥したのであつた。懷信の「自鏡錄」上に

神都福先寺僧某乙、於<sub>ニ</sub>一時中<sub>一</sub>忽然命終。遂於<sub>ニ</sub>業道中<sub>一</sub>見<sub>下</sub>信行禪歸作<sub>ニ</sub>大蛇身<sub>一</sub>、遍身總是口<sub>ト</sub>、又學<sub>ニ</sub>三階人<sub>一</sub>死者、入<sub>ニ</sub>此蛇身口中<sub>一</sub>莫<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>去處<sub>一</sub>。(正藏<sub>51</sub>—806)

とはそれである。

然れどもその遺教に就ては、唐の徳宗貞元十一年(795)に、西明寺の圓照は奏して「碑表集」五卷を入藏し、尋で十六年には遂に勅して、「三階集錄」三十九部四十四卷を、大藏中に編入した。これ蓋し三階教の勢力、那邊にあるや知るべきである。斯くて此等の中現存せるは、「三階佛法」四卷。「明大乘無盡法藏」一巻の外、大英博物館に於けるスタイン蒐集の十四斷片。巴里國民博物館所藏のペリオ

蒐集の五斷片、此外京都の富岡家藏の一斷片等である。而して此等は全部、矢吹博士の「三階教之研究」の卷末に、「燼燼出土三階教殘卷」として載せられて居る。

## 七

上述の如く三階教は、早く隋時代に於て、末法佛教在家佛教を主張したもので、その思想内容並に形式の上に於て、勿論純雜難危細の別はあれ、我鎌倉期に於ける末法佛教たる、淨土教並に吾祖の教義に對し、その類似点は蓋し二三には止らぬのである。就中その根本思想は、正像末三時の廢立である。その他人即ち機の判あるも、斯の如き約時約人を内容とする、第一第二階を正像の別法とし、第三階の末法は普法普教の佛教とするのである。

普別二法の思想に就ては、曾て道忠が「詳疑論探要記」六に

三階集録の處々に普別二法を明すと雖も、文義幽隱にして是非地無く、唯須く普別の文を編綜して後昆に備ふべし。愚推の及ぶ所少々料簡を加へ、違を會すと雖も、量となすに足らず。(淨土宗全書六、二九七)

といへる如く、全く三階佛法獨特の用語であつて、その概念容易に把持し難きものがある。之に就ては「對根起行法」の斷片に、一切法盡を明す下、普想大乘法を説いて

莫問外經內經、不作高下心、爲除分別病故、普作大乘解(三階教之研究、別錄一一二)

といふに見れば、且らく大乘の教に就ても、内外の分別も無用であれば、勝劣淺深の分別も不可である。

又その次下に歸一切法盡を明すに、内經に就て一に經卷法、二に極重惡法、三に世間之法、四に邪善佛法、五に十二種邪見成就衆生所歸法、六に十二種正見成就衆生所歸法、七に一切諸佛菩薩應說空見有見法、八に普想大乘法の八種を擧げて居る。是等の八種孰れに就ても、高下勝劣の分別をなさばこれ正像の別法であり、末法に普法に對して謗法を成するのである。

## 八

今更に進んで一乘三乘の佛法の上に於て普別二法を解せば、一乘の思想は普法に當り、三乘の思想は別法に當るのである。即ち普法とは一乘にまれ、三乘にまれ、各法當分に於て絶對價値を認め、他と相對して何等淺深高下を判せぬのである。之に對して別法とは、三乘當分に於ても、各々の別異勝劣を立て、又他の一乘に對しても一三の高下を判するの謂である。故に普法とは圓融相攝の意であり別法とは隔歴不融の意である。即ち普法とは一切の教法に對して、高下優劣を超越した、法華所謂開會思想に立ちての、諸法の絶對的價値批判をいひ。別法とは之に對して、相對的價値批判の謂である隨つて當時南三北七等の佛教敎判は、孰れも相對的價値批判の敎判で、普別二法を以て諸法を判する三階敎と相容れざるものである。

されば信行に隨へば、當時は末法普法の時なる故に、法華華嚴等の一乘教乃至淨土の念佛等は、孰れも相對敎判に依る別法なる故に無益である。一法に執せざる對根起行即ち時機相應の普法のみ益ありて、餘は總て相對的別法なる故に、無益否謗法なりといふのである。

## 九

斯の如く普法に立ちて、別法を貶することは、他の末法佛敎中淨土敎に於て、法然が念佛一行を取つて、他を捨閉擲抛と判じ、吾祖が法華經以外の信仰を指して、謗法となすと頗る似たるものがある。然るに普法はこれ等と大にその趣を異にし、「教彌々實なれば位彌下り」といひ、「高山の水は幽谷を穿ち、最高の敎は下機を救ふ」とは、普法以外の末法佛敎の通格である。然り三階佛法は之に反し、

上好佛法(一乘等)不生於道<sup>一</sup>、下惡佛法(普法)乃有道生<sup>二</sup>(對根起行法、別錄一五二)

といへり。即ち末法は生盲衆生の下機なる故に、至極の敎法を用ゆべきに、上好佛法の一乘等を以て無益といふは、末法は第三階の生盲衆生の故である。

信行は之を説明するに、好菜と肥料との譬を以てした。即ち好菜を取らんとして、金銀七寶の糞を以て肥料としても好菜は得られぬ。矢張屎糞の肥料にして、よく好菜を得と一般であると、巧みなる説明を試みて居る。即ち末法生盲の衆生には、一乘三乘の別法は無用である。唯時機相應の普法のみを用ゆべしといふのである。



吾人は此に於て、吾祖の「四信五品鈔」に於ける、唱題の利益の問答を想ひ出さずには居られぬ。

問、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其義<sub>一</sub>人、唯唱<sub>二</sub>南無妙法蓮華經<sub>一</sub>具<sub>三</sub>解義功德<sub>二</sub>否。

答、小兒含<sub>レ</sub>乳不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其味<sub>一</sub>自然益<sub>レ</sub>身、耆婆妙藥誰辨服<sub>レ</sub>之<sub>(四五)</sub>

といへるは、吾祖教判に於ては法華獨一成佛を主張し、餘他の諸經を以て悉く謗法と判ずるも、末法一同の行法たる受持一行に至つては、乳の譬を以てせるは、教判の意に矛盾するを覺るのである。吾人は今の乳喩と肥料喩とを比して、普法と題目との間に、何等か超教判の宗教的意味の、共通点のあることを見出すものである。

## 一〇

矢吹博士は「三階教之研究」に於て、三階教と吾宗とを比較して

唯三階教は未だ、天台華嚴の教理を知らず、密教の事相を知らざりしかば、單に經文の羅列に終りしも、若し三階教にして、天台の十界互具、壽量本佛、性具性惡の諸説を知らしめ、假に密教曼荼羅の思想を加味して、試に普佛曼荼羅を描かしめんか、畧十界勸請の曼荼羅に、鬚髯たるものたりしは、蓋し想像に難からず。(五八七)

この記事を見ずとも、吾が宗徒として誰がその形式上に於ける共通点のみならず、不輕繼紹の事實に於て、諸宗迫害の歴史に於て、相類似せるに驚かずに居られよう。併し六萬九千三百八十四字よりな

る、法華の一部八卷は五字七字の題目に結歸するまでには、二千數百年の思想史の内容がある。此の内容たる思想史の研究が、吾祖教學の全背景である。されば宗學の完全な結論は、その内容を明瞭にするに非ざれば恐らく不可能である。

斯る見地に立つた時、吾人は望洋の感に打たるゝが、何といつても宗學の根本思想は、法華經に據つた天台思想であり、五綱教判はその思想的源を三階教に認め、この内面的發達と、題目の行相とは之を淨土教に見、若し行門たる三秘の展開に至つては、眞言密教の三密を離れては、その行相は勘えられぬ。即ち三秘展開に對して、眞言密教の洗禮を認めし以上、吾人は慈覺智證安然等の、所謂獅子身中の虫も亦、宗學展開への思想史から見れば、善知識といはねばならぬ。併し乍ら斯く大成された吾祖の力は、實に内相承の佛智でなくてなんであらう。

一一

更に進んで吾祖の觀た三階教は果して如何といふに、信行が普法以外の佛法を以て、悉く別法とし謗法としたのと逆の筆法を以て、法華に對して三階禪師を以て、謗法の徒としたとは、吾祖の三階佛法觀である。

吾祖の遺文中三階教に關する記事は、概ね左の諸鈔である。

(一)「聖愚問答鈔」三六

文永二年

(二)「撰時鈔」二七

建治元年

(三)「下山御消息」三五

建治三年

(四)「曾谷二郎入道殿御報」三〇

弘安四年

此等中(一)以外は孰れも佐後の御書である。(二)も文永二年とするは、「日明日録」の説で、「境妙庵目錄」は弘安四年とするし、且つ本鈔は日持聖人の筆に成つたものといへば、矢張佐後と見てよからう。さうすれば吾祖の三階教の破折は大体佐後といはねばならぬ。

今右四鈔に就て見るに、共通の批判は謗法の一句に盡きるが、就中(一)(二)(三)の三鈔は共に「大蛇となり」と述べて居る。由來吾祖は「下山鈔」に「禪宗の三階信行禪師……」といへる如く、三階佛法を以て禪宗の一派と見られた様である。これ三階が普法を立てたからであるが、普法とは一乗三乘に非らざる、普眞普正の佛法といふ故に、一定の經典は認めぬから、此点から見れば勿論禪宗ではないが、禪の教外別傳と彷彿たる教である。此点を以て吾祖は禪宗に接したのであらうが、これは三階の教書は幾多の迫害に依て、教法と共に煙滅したことに起因するのである。爲に「朝鈔」一九四「健鈔」二六(三五)の如きは、信行寂後五十八年に寂した、禪の第六祖通信禪師と誤るに至つたのである。

此外(二)(三)は普別の二法に就て謗法と述べ、(三)(四)は淨土教の道綽善導法然と共に、入阿鼻獄の人と判じて居るが、此点から見れば禪宗に接しつつも、尙ほ淨土教と同じく、末法佛教として

取扱はれたことが明白である。

一一一

今(一)(二)(三)に就て吾祖の三階佛教觀を見るに、(三)の「下山鈔」には

禪宗の三階信行禪師は、法華等の一代聖教をば別教と下たす。我が作れる經をば普經と崇重せし故に四依の居士の如くなりしかども、法華經の持者の優婆夷にせめられてこゑを失ひ、現身に大蛇となり、數十人の弟子を呑み食ふ。……無間地獄はまぬがれがたし。(八五)

と述べ。「撰時鈔」には

漢土の三階禪師の云く、教主釋尊の法華經は、第一第二階の正像の法門なり。末代のためには我がつくれる普經なり、法華經を今の世に行せん者は、十方の大阿鼻獄に墮つべし。末代の根機にあらざるゆへなりと申して、六時の禮讚、四時の坐禪、生身佛のごとくなりしかば、人多く尊みて弟子萬餘人ありしかども、わづかの少女の法華經をよみしにせめられて、當座には音を失ひ後には大蛇となりて、そこばくの檀那弟子並に少女處女等をのみ食ひしなり。今の善導法然等の千中無一の惡義もこれにて候なり。(三七)

と述べて居るが、以上兩鈔の意に依るに信行は、法華等の一乘教を以て第一第二階の別法、正像の法門を貶し、且つ末法は普法の時なれば、末法の法華經の行者は無間地獄と、逆の法門を述べた故に、

却て法華經の行者の少女に責められて、當座に音を失ひ、現身に大蛇となり、弟子檀那を食ひ遂に無間地獄に落ちたといふのである。

吾祖の法華一部末法爲正の説と、今の信行の説とは正反對である。

### 一三

此の記事は正しく、唐の懷信の『釋門自鏡錄』上の「唐裏州神足寺慧眺謗三論拔舌三尺事」の下に附せる、孝慈、神昉、信行の三階諸禪師の傳中、孝慈、信行、師資の傳意を取つて述べられたものである。即ち孝慈傳に

一時在岐州說三階佛法、于時有優婆夷持法華經、又勸有緣、其禪師言、汝持法華經、不當根機合入地獄、優婆夷情中不忍、發願之時其禪師被神打、失音不語云々（正藏卷一〇〇〇）  
畧引、法華傳記九引同文（五十一—五二）

の文と、前引信行大蛇となるとの意を以て記されたものである。

更に謗法蛇身となることは譬喩品の偈に十四謗法を説いて、「若人不信、毀謗此經……其人命終入阿鼻獄」と述べ。更に重謗法に就て「更受蟒身、其形長大、五百由旬、……謗斯經故、獲罪如是」と説ける文意に依て述べられたことは明かである。且つ吾祖の信行大蛇の記述も三鈔皆少異がある。即ち『下山鈔』は「こゑを失ひ現身に大蛇となり」といひ、『撰時鈔』は「當座には音を失、後

には大蛇となり」といひ、『聖愚問答鈔』は「大慢は生れなから無間に入り、三階は死して大蛇となる」といふが、これは同一事實を述ぶるに當つて、他の謗法諸宗の組合せから來た様である。得ち『下山鈔』は眞言禪念佛の三宗に附し、『撰時鈔』は善導法然の念佛に附し、『聖愚問答鈔』は月氏の大慢婆羅門に附した故である。

下山鈔 現身大蛇——眞言禪念佛の三宗

撰時鈔 後に大蛇——善導法然の念佛 無間

問答鈔 死後大蛇——大慢婆羅門

右に見て明なる如く、信行の謗法に就て現未の二時に於ける時間的の相違は、自ら謗法の淺深を現すもので、吾祖の謗法觀は眞言最も深く、念佛之に次ぎ、外道又之に次ぐ故である。而して若し破折に於ては、淺より深きに及び、佐前未破兩家眞言といふ如く、佐前念佛佐後眞言の次第あるに見て、いよく明かである。

#### 一四

上述の意を最も明かにするものは、信行に就て最後に述べた『曾谷二郎入道殿御報』の記事である。即ち右に依れば、譬喩品の「其人命終、入<sub>三</sub>阿鼻獄」の文を出して、經文に所謂「其人とは何等の人を指すや」の問に對して

其人者指<sub>二</sub>此等人人<sub>一</sub>也。彼震且國天台大師者指<sub>二</sub>南北十師等<sub>一</sub>也。此日本國傳教大師者定<sub>二</sub>六宗(南都)八人<sub>一</sub>也。今日蓮指<sub>二</sub>弘法慈覺智證等三大師。並<sub>二</sub>三階道綽善導等<sub>一</sub>云<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>也。(五〇)

と述べられたのを見るに、天台傳教日蓮と正しく、法華外相承の師の上に就て之を判じ。天台に對しては南三北七、傳教に對しては南都六宗が謗法墮獄の人である。而して吾祖に對しては、先づ謗法の深きより擧ぐれば、東密の弘法、台密の慈覺智證の所謂兩家真言の三大師。之に次ぐが支那に於ける三階道綽善導の三師である。且く三階を禪と見れば、先づ真言之に次ぐが禪念佛とせられたのである而して後の三師は佐前對破に當り、先の三大師は佐後の對破に當るのである。

今の『曾谷鈔』の意を以て、先の三鈔を見れば信行大蛇の記述に、淺深與奪のある所以自ら了すべきであらう。若し三階佛法を評せし、吾祖の記事が孰れも佐後にあることは、勿論三階佛法を禪の一派と見た、法門の内容より考へ得るも、禪宗破は佐前の通格なれば、吾祖は且らく三階を禪に接したが、その法義の内容に於て禪淨土に勝れる、一種の末法佛教と解せられたからであらう。

## 一五

若し右の破折の次第に就ては、『撰時鈔』一鈔に就て見るに最も明了であつて、彼鈔上卷に於て三國佛教の展開を述べ終つて

先づ三つの大事あり……此の三つのわざはひとは、所謂念佛宗と禪と真言宗となり、一には念佛宗

は日本國に充滿して四衆の口遊とす。二に禪宗は三衣一鉢の大慢の比丘四海に充滿して、一天の明導をもへり。三に眞言宗は又彼等の二宗にはにるべきもなし。(二七)

と述べ、下卷に三宗を破折し、最初に念佛を破し、その最後に於て三階佛法を破し、

此等の三つの大事はすでに久くなり……これより百千萬億倍信じがたき、最大の悪事はんべり(二八)とて台密の慈覺等に及び、

日蓮は眞言禪宗淨土等の元祖を三虫となづく、又天台宗の慈覺安然慧心等は、法華經傳教大師の獅子の身の中の三虫なり(四〇)

と判じ、所謂三度の高名を述べて。

此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず、只偏に釋迦如來の御神、我身にのりかわせ給ひけるにや、我身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申す、大事の法門はこれなり。(四三)と結ばれたのに見て、吾祖一代の破折の次第は明了である。

上來吾祖の三階佛法觀に就て述べたが、最後三階佛法と吾宗との關係に就ては、宗教的立場から、將又佛教史上から、更に幾多の内容的研究を要すると信ずるものである。

因に御遺文末註中三階佛法に關せし箇所は左の如し。



- 一、健鈔 六五五(三五)
- 一、啓蒙 一一二六(七九) 二一〇五八(三五) 三二一四三
- 一、圓註 七二三(上三〇)
- 一、拾遺 二二五(六三)
- 一、考文 一二五(四三)
- 一、充浴園全集 二四一七
- 一、本化聖典大辭林 二二七五 三二二七

(三、九、一一稿)





## 佛子の進むべき大道

丸 山 顛 孝

世人多くは匆々として衆務を營み、年命の日夜に去ることをも覺せず、煩惱の波高くして靜まることなし、生死の海深くして底を知らず、唯徒に五欲本能の樂を貪りて、生死の苦海を押渡り、涅槃の岸に至るべき船を需めんとする様もなし。

吾等如何なる宿縁の報ありてか佛弟子となり、三界無安の火宅を逃れ、常樂我淨の佛道に辿り入りぬ、されば我身佛になるのみならず、父母を救ひ、祖先を助くるの功德あり、誠に世にも尊く亦惠まれたりと云ふべきなり。

佛大集經に説き給はく、頭を剃り袈裟を着ぬれば持戒及毀戒ともに天人之を供養すべし、是即ち佛を供養するものなり。と吾と我弟子賞讃の辭も懇なり、實に我等末輩は身に一つの戒徳もなく、心に三毒を離れざれども、無學破戒をそのまゝに、佛の瑞喜身に餘り、世の尊信は分に過ぎたる極みなり

宗祖大士が、元より學問し候事は、佛教をきわめて佛になり、思ある人をも援げんと思ふ、佛になる道は身命を捨つる程のことありてこそ佛にはなり候らめと推し量る。と仰せ給へるは實に吾祖が敢然として胸中の決意を述べたまへる出家門出の宣言なり。

時は移り世も亦變りて、末の代となれば我人共に漸く恩に忝れ、勇猛にして精進し、心を擧して常に勤むる心失せ、我慢に著し、師をいやしみ、檀那にへつらうこと日に繁し。

傳教大師は此のことを慨きて顯戒論に訖王の物語りを引きて吾等を戒め置き給ひぬ、抑訖王の物語りとは、往昔波羅那城に大王住みぬ、此王或夜夢みらく九頭の大なる獼猴ありて、盛に城中を騒亂せり、然るに他の一匹は知足の念を懷きて少しも騒ぐ様もなし。夢醒め終つて大王餘りの不思議さに占者を召して之に問へば、彼恐るゝ答ふる様、こは恐るべし王位篡奪の凶夢なれば、大王心して然るべしとぞ答へけり。王之を聞きし後は暫くも安ずることなく、急ぎ迦葉佛の御下に詣で、委細を告げて教へを乞ひぬ。佛王に告げて宣べ給ふよう、これ汝一人の難にはあらず、末法濁惡の未來に於ける佛法陰没うすだの相なれば、王心に正法を信じ護惜建立の誠を致さば、國土永へに安穩ならんとぞ諭しけりと云ふ。この一猿九猴とは末代に出家入道する者の動機を數へ給へるなり。九猴とは、一は貧人として衣食に乏しきため、二は奴婢として身分の賤しきを逃れんため、三は債負として財政破産し終れるため、四は勝地として勝景靜境を願ふため、五は名稱として世間に賣名を欲するため、六は生天として誤れる果報

を需めんため、七は利養とて己が懷を肥さんため、八は求王とて貴き位を得んがため、九は述過とて佛敎の缺點を搜さんための出家なり。亦一猿とは少欲知足にして眞實に發心して道の爲めに出家せるものを擧げたるなり、實に今の世は九猴に類するものは多く、一猿に當るものは爪上の土よりも少く、市中に虎を需めんよりも尙稀なること大師の御言の如くなり。

吾祖は破佛破法の吾等を敎へて宣ふよう、大族王の五天の堂舎を燒き拂ひ、十六大國の僧尼を殺せし漢土の武宗皇帝の九國の塔寺四千六百餘所を消滅せしめ、僧尼廿六萬五百人を還俗せし等の如くなる惡人等は佛法をば失ふべからず。(撰時抄) 我法は惡人外道天魔波旬等には破られず、佛の六通の羅漢の如く、三衣を袈裟の如く身に紆ひ、一鉢を兩眼にあてたらん持戒の僧等と、大風の草木を靡すが如くなる高僧等吾正法を失ふべし。(神國王書) 人久しと云へども百年には過ぎず、其間のことは唯一睡の夢ぞかし、受け難き人身を得て適出家せる者も佛法を學し謗法の者を責めずして、徒に遊戲雜談にのみ明し暮さんは法師の皮を着たる畜生なり、法師の名を借りて世を渡り身を養ふと雖も、法師となる義は一分もなし、法師と云ふ名字を盜める盜人なり、恥すべし恐るべし、とこれ我等の身にとりて金科玉條に非ずして何とやせん。

恒に蒼海の窮りなきを觀るものは、その大いなることを知らず、常に畦かきりなき原野に居るものは其廣きことを知らず、是久しくして狃なるればなり、豈たゞ海洋と原野とのみならんや。

吾等常に諸惡莫作、衆善奉行と唱ふれども、偶來し方の跡を顧、進まんとする道を仰げば轉々懺悔歎息の自ら禁じ難きを覺ゆるなり。

蓋し我等の行する佛教は自行と化他との二柱ありて世に住す、智慧を研き、精こころを鍛へるを定善と云ふ、これ即ち自行なり。他人を教へ堂塔を建つるを散善と云ふ、これ即ち化他と云ふなり。此の中散善は近くして行じ易けれども、定善は遙に修し難し。定善を更に分ちて行學の二とす。吾祖の行學の二道を勵み候べし行學絶へなば佛法はあるべからず。(實相抄)との給ふのはこれなり、此の二道は鳥の雙翼、車の兩輪なれば元より、傍正主伴は辨じ難きも、次下に行學の二道は信心より起るべく候とあるを拜すれば正しく行の家の學なることは明なり。散善とは又自ら著述、說法と堂塔建立等の二となるべし、此の中堂塔建立は俗人の所行なり、說法開導は沙門の勤めなり、古よりそのためし殊に多し、奈良の東大寺は聖武天皇の御建立、京の卅三間堂は白川法王の御建立なり、當家の大伽藍又多くは在家特志の建立に依るもの多きを見ても知るべきなり。

堂塔の建立せらるゝ所以を考ふれば、當時の貴僧高僧何れも、教化救濟の徹底して親切篤實なりしが爲なりき。是等名僧智識の深遠微妙なる說法教化の源泉は一に學問修徳の功に非らざれば到底望み難きことがらなり。然るに學問の功をも積まずして他方に弘通せんとするもこれ如何程の功があらん亦不學にして堂塔の建立を營むとも誰か後代まで之を崇むべき。蓋し定散二善の内、定善の人目に顯

はるゝことは誠に容易ならざれども、之に反して說法堂塔建立の散善は忽ち衆目を吸引す、これ人情の常として主たる自行を忽にして、従たる化他に急ならんとする所以なり、吾等は名聞材利の爲めに佛道に入りしには非らざるなり、人目世評を本位として學問修行に日夜精勵するにはあらざるべし。要は唯佛敎を成して、父母、師匠、恩ある人に報ひんこそ出家の素願にてあるべきなり、深きは難く淺きは易し、易きを捨てゝ難きに就くは丈夫の心なりとは宜<sup>うづ</sup>なるかな。

堂塔高く甍を連ね、經藏軒を並ぶるとも、高德の人無くんば誰をか需めて師とやせん、道を體驗する人なくんば講經談義の聲も絶へなん。これ所謂伽藍の佛敎にして、佛敎本來の命脈は既に壞滅して奈良平安の佛敎にも如かざるべし、佛法には賢げなる様なれども、時に依り、機に従ひ、先後弘通に依ることを辨へざれば、身心を苦しめて修行すれども驗なきことなりと吾祖の誠め給へる如く、吾等の修行には自行あり、化他あり、自行の中にも行あり、學あり、化他に就ても講經あり、建立ありて取捨宜しきを得て一向にすべからず、廢立取捨は一定ならず、圓轉自在なりと雖へども、吾等佛子の進むべき大道は、正しく自行の家の化他なり、徳行の家の學問なり、講經談義の家の堂塔建立なるべきなり、吾等今より二陣三陣と御跡を繼ぎ、唯此白道を邁進して倒れて而して息まんのみ。

## 宗教現象に對する一考察

近 藤 惠 聰

近世佛國に於ける社會學の創始者たるコムトが、彼の主張せる實證哲學の學說に於いて、「人智發達の三階程として形而上學時代に次ぐに積極時代を認めたる事は周知の事實である」蓋し彼の云ふ積極時代とは科學萬能の時代を指すものにして現代に於ける諸般科學の振興は、終に近代人より聖なる宗教的信念の情操を破壊したかの感がある。凡そ眞、善、美、聖等の目的價値は人格完成上常にその要請する處なり。と雖もかゝる精神的人格的要求が輕視され無視されんとするは誠に遺憾なり。彼の共產黨事件は實にその根本に於いては共產主義的經濟制度の確立の要求であり、又金融解禁外國爲替相場の變調並びに工場社會に於ける勞資對立及び協調等の問題も物質生活に關する問題であり、今や時代の一大風潮は滔々呼々として經濟的「富」の問題に趨き殆ど富と生物的生活とに終始してその底止する處を知らず。正に今日に於ける思想的二大潮流は唯物論と唯心論との絶わざる争鬭なりと論斷せざる可からず、此に於いてか經濟變動の恐慌パニックに日夜その生活を脅威されつくある現代人にとりて最高のオアシスとは何ぞやと問へば、人必ずや其の一面に於いて私有財産制度の確立又は否定に於いて魂の

安住處を求めんとする事や又當然の理論なりとす。

斯くして諸般經濟問題の疾風の威壓は、終ひに我等が唯物論上に於ける一個の文化的要求としてマルクス、エンゲルス等の經濟組織變更の出現を望み、此に社會問題の中核をなし又人口問題並に食糧問題等、或は婦人問題中最も致命的の制度と云はれる公娼制度の如き數に來れば、實に複雑極まる社會相の全面や其の解決に於いて至難なりと云はざる可からず。

之等種々錯雜紛糾せる社會現象中に於いて、特に「聖」の實現を理想とする宗教の任務が當に其の窮乏に落入り「宗教の破産」を宣告せられつゝあるは、之又留意せざる可からざる處なり、過般新聞紙の報導に依れば、米本國に於いては プロテスタント 新教の衰亡を嘆じつゝ有るものあり、又キリストの聖地エルサレムに於ける宗教會議と云ひ、又は明治神宮外苑青年會館に於ける神、佛、基の宗教會議に於いて社會事業の新設及び世界平和の將來にその會議の陣頭を進めしも、遂に本會議未曾有の混亂に落入り龍頭蛇尾に終はりしは、人の好く知る處なり。然りと雖も日本最高新聞紙の社説に於いて「宗教は合致せざる可からざる性質のものにして之等宗教團體が其の聖なる事業の一端として社會的問題の内容に迄入り其れを實施せんとする事は却つて其の宗教に於ける奇現象を呈するものなり」と云ふ論説を見出したるに於いては、吾人宗教家に對する一大鐵槌なりと言はずむばあらず。

此に於いてか吾人は先づ外にその全からん事よりも、内に全からん事を欲す、即ち大谷大學金子教



授の阿彌陀及淨土の觀念に就ての問題の如き、又は神の證明に於ける獨斷哲學及び夫以後の哲學的論證に於けるが如く、其の學と宗教の背反、換言せば知信分裂の問題の如き信仰の破壊之より又甚しきは有らざるの感あり、曾つて中世フランス派の律僧ロージヤベーエロン (Roger Bacon) が法皇クレメンヌ四世に奉りし著述の中に「諸科學の最高價值はそが神學に對する必要條件として存在す可きものだ」と曰へる法則は今日全く破壊されて、諸科學の研究的良心に於いては、寔に宗教の傳統的教學は儼然として破壊さるゝ事は勿論なりと曰はざる可からず。

然し破壊せらるゝに先立ちて新しき組織の建設が無ければならない、即ち此に宗派に於ける保守派と進取派の思想的衝突があり争闘が有り知信の根本的分裂が存在するのである。斯る論點に於いて吾人は先づ其の眞理探究の學徒として、外に全からん事よりも内に全からんとして傳統宗學のコペルニクス (Copernicus) 的轉廻を信じ、ローランの所謂「新らしき世界」の出現を望み、感激なしには讀み得ざる不滅なる宗學の一頁が出現せん事を欣求し、以つて宗教と學との眞實なる交渉を最後に望まんと欲求する次第で有る。

## 眞の宗教への道

矢野 鍊明

宗教肯定論者は「宗教は人と人以上の者即ち神との聖交なり」云ひ、亦「宗教は吾々の心霊がそれ自身の内に見出しぬない處の善美を實現するために、それ自身以上の實在に向つて喘ぎゆくことである」と、或は「我等の道德的義務は神が與へ給へる命令だと悟ること、之れ宗教である」と云ひ、又「宗教とは客觀的實在に對する絶對憑依の感情である」と定義してゐる。然るに宗教否定論者ども云ふべき唯物論者フオイエルバツハは「人間は自己の願望の對象を理想化してそれを自己に對立する實在と考へ、之を神として祈願を捧げる、而もかくの如きは畢竟幻想たるに過ぎない」と云ふに至つては宗教も神も實に無味乾燥のものとなり、隨つて人間の願望の投影たる神を信することは人類の不幸である。と彼は考へた。

然し何れにしても我々は神なり佛なりを信する爲にかく宗教を定義し、信仰の對象を定義しなければならぬか、又定義し得て初めて信仰心が起るのであるか。といふに我々はこれ等の定義がなくとも又神の實在に對する證明の努力がなくとも、又神を否定する者があつても、それ以前に於て既に神を

信じてゐるのである。それが神を信ずると云ふやうなはつきりしたものでなくとも、自己の貧弱無能を深く凝視すればする程何となく神のやうなもの、偉大なるものを信じて絶りたいやうな氣持ちになる。こゝに宗教的感情の先天性とも名付くべきものがあると想ふ。

## 二

然し我々は先天的にこのやうな感情を有するとしても、宗教の輪廓を科學的に定義付けて之を畫くとき、その信仰對象の實在性と神秘的威嚴とが疑はれるのみならず何となく以前のやうな純な感情を以て禮拜することが出来なくなる。こゝに安價なる偶像の破壊、宗教の否定が起るのではなからうか。或人は偶像を破壊し、神を否定した。彼等はその慰安を宗教以外に求めんとした。然しその三昧には仲々這入れなかつた。彼等の満たされざる淋しき心——それは遂に何物にか縊らんとする感情、その感情迄ゆかぬとしても、神の如き「力」あるものゝ存在を欲求した。かゝる欲求はそのやるせない心の底から力強く頭を擡げ、遂に神を否定して神を信じ、偶像を破壊して生きた血の通ふ偶像を建設した。この過程は宗教信者に於いては、尤も苦しい、悲惨な、なやましいものであり、そして恐らくこの苦しい過程こそ苦闘を續けた体験者でない限り想像は出来ないのであらう。而して一面この過程位尊いものはないと思ふ。その過程は唯「破壊より建設へ」の一語に盡きるが、その間、人間は如何に淨化されることか。この破壊は知信の闘争である。否定すること、それは餘りに淋しい、然し信す

るには又餘りに空虚だ。我々が神に對し空虚を切々に感ずるとき、そこに神の否定があり、亦そこに建設の若草が萌生するのである。

如何なる過程を経、如何なる根據に立脚しての無信仰であるかは分らぬが、少なくとも現代人の無信仰を見ると、何となく淋しい。既成宗教が嫌であり、偶像に價値を認めないとしたら、もつと眞面目に破壊し盡すべきである。

### 三

我々は神の名を稱へ、佛の御名を唱へて合掌する人の姿を尊く思ふ。神の名を稱へる人こそ人生の眞の意義を知り、佛の御名を唱へる者こそ幸福であり、自己を眞に知る者である。佛に華を捧げ、香を燒き、合掌する清らかな心の所有者は遂に人間をも合掌したくなる、不輕菩薩が「我深く汝等を敬ふ、敢へて輕慢せず。所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし」と。佛を禮拜する心は善人を崇敬する心である。随つて他人を敬へば自分も敬まはれるであらう。又この感情は鳥獸より草木へ、宇宙全体へと進展して宇宙愛に生きることが出来るやうになるのではなからうか。この境地迄來れば、自己と社會との關係がより明かになり、無神論者の想像だになし得なかつた宗教的犠牲の精神も生れて來、現代やかましい社會問題の解決の鍵も得られるやうになると思ふ。

### 四

かく神を信じ、佛を信じた者がいつ迄その信が續くか、それは各自に關することであり、又未知の問題である。要は唯信じられればよいのではなからうか。然し神なり、佛なりを信ずることに各人の現在の信に至る過程及現在の信の状態によつて信仰の對象に淺深高下のあるは免れない、即ちルーソーが懺悔録の中に「概して信仰者と云ふ者は、各々自身の通りの神を爲る。正人は善神を爲り、惡人は邪神を爲る」の類である。故に我々は實に於いてよりよき信仰者とならねばならぬ。その爲には我々には生爪をはがすやうな變化を豫期せねばならぬ。その過程が波瀾曲折、宗教の破壊に次ぐに破壊、本尊の否定に否定を以てし、絶望の淵より光明へ、光明より又暗黒へと向ふいたましい過程こそ眞の宗教を建設する所以のものではなからうか。我々は心からこの過程を欲しない、出来ることならば唯有り難くて、毎日々々を感謝の生活、法悦の日を以て過したい。然し我々の理知はそこに妄信をゆるさぬ。こゝに知信の闘争があり、この波瀾曲折があるのだ。而し破壊は建設の爲の破壊である。我々は神や佛を信じられなくとも決して絶望する必要はない。又いつか妙法の華咲き、果結ぶ時もあるのだ。唯我々は知信の闘争を経てこそ眞の宗教を建設し、我々の精神に躍動する生きた佛を創造することが出来るのだ。



## 民衆の宗教化

方　　哲　　源

従來のまゝの宗教では、今日のやうに複雑に進展してゆく所の一般民衆を如何にして宗教化するかは實に困難であると思ふ。宗教化とは信者をつくることではない。その宗教の精神が人々の心に働き、その智情意を聖化し、眞理、道義に合つた言行をなし、個人、國家、世界に對して、正善の貢獻をなすに至る事である。かゝる信者をつくるのが眞の宗教化である。

我等は困難に遭遇した場合必ず神人合一の信仰心から出てくる神智明斷を以つてこれを解決し處理せねばならぬ。神佛は實に聖愛であると共に、絶大の全智全能純美の實在である。而してその働きも唯人の罪を救ふと云ふのみでなく人間を生老病死等の一切の苦や不幸から救つて下される慈悲の救ひである。そして救ひを受くる我々は、唯絶對なる神を信仰する處即ち斷疑生信の當處に救ひがある。これが所謂神佛の恩寵である。

神佛は教育者として斷えず我々を教へてくれる。イエスが「我は罪人を招かんとして來れり」と云ひ、「迷はざる九十九頭の羊よりも、迷へる一匹の羊を求む」と云つたのは「神の救ひの道」であり又

「天の父の完全なる如く、汝等も完全なるべし」と云つたのは「神の教育の道」である。救ひも教育も共に神の恩寵である。之即ち日蓮上人の行學二道であつてこの行學二道の成就是、神人合一の禮讚的榮光の姿である。

人間は神佛の實在と完全を要請し、信仰し、修行する事に依つて自己の人格を向上させ、亦他人をも教化向上させる事を得るのである。基督曰く「永遠の生命は、神を信ずると共に汝の業をなし遂げるに由つて、我は地上に汝の榮光をあらはせり」。

神佛は宇宙萬物を統一主宰し、國家の盛衰興亡、人間の榮枯生死を主宰する所の最高の慈悲者である。古人が「死生有命富貴在天」と云ひ、「事を謀るは人にあり、事を成すは天にあり」と云ひ、「人事を盡して天命を待つ」と云ふたのはそれである。この神や佛を尊崇し、この神や佛の宇宙主宰の大精神を學び、以てそれを國家の經營、町村の經營、學校の經營、工場の經營、農村の經營等にうつし、これが成功の曉は榮を神や佛に歸し感謝して自ら誇らず、失敗するも望みを失はず自己の無智不徳無才無力を反省して、修行し向上することこそ、善き精神であり亦之によつて萬事を成すことが出来る。基督は「我父は今に至る迄働き玉ふ、我も亦働くなり」又曰く「我は眞の葡萄の樹、我が父は農父なり」と云ひ、パウロは「神と共に働く」と云ふたやうに、かゝる神人合一の心を以て神や佛の如く振舞ふ。これが眞の信仰、眞の修行、眞の傳道、眞の勞働である。名譽の爲に働かず、利益の爲に

働かず、神や佛の心を學び、神や佛の働きに倣ひ、人格、事業、國家、世界の完成の爲に働き、神佛の天地完成の大事業に參與して働く。こゝに日蓮上人の所謂婆婆即寂光觀の精神の理想が實現される。この精神を以て治者、被治者、教育者、傳道者、信者、未信者、經營者、資本家、労働者一切を教養することによつて、初めてよく民衆を宗教化し得る事が出來ると信するのである。その完全なる信仰と活動とによつて國家も世界も漸次にこれを宗教化し、現實社會を淨化し、そしてこの地上に理想郷たる佛國土を建設しなければならぬ。即ち日蓮上人の大難小難流罪死罪を忍受せられたのも亦身延山九ヶ年の悲惨な御生活も、以上に述べて來た理想を實現せんが爲であつた。然るにこの大理想を承け繼ぐ吾等日蓮門下にして、今日その精神を全うすべき人が果して幾人あるだらうか、聖人世を去ること最早六百幾十餘年、聖人の精神が文々句々に刻み込まれた所の法華經の眞理の顯揚に最大努力をなすべきにも係はらず徒らに法要葬式の道具にのみ用ひられてゐる事は遺憾千萬である。故に我々はこの時に當り、自己の爲、國家の爲、社會の爲に日蓮門下として大いに反省し、法華經の理想を實現すべく共同戰線に立たねばならぬ。





## 亞細亞の目ざめ

中 屋 教 海

吾々の夢は數世紀續いた。夢としては長く、悠久の前には單なる一つのエピソードである。十九世紀に於ける泰西文明、即科學文明は永き人類の歴史に於ける一つの挿話である。——我々が今立つてゐるキャピトリン丘は、嘗つては羅馬帝國の首都、諸王恐怖の處であつた。この世界は如何に變化し、如何に流轉して行くことであらう？——キャンピトリン丘上から廢都を眺めて、ポツギアスは斯く叫んだ。

第二のポツギアスが出でぬであらうか。新世界のキャピトリン丘から、倫敦を、巴里を。紐育を俯瞰して。世界の廢墟、變化を嘆んずる日が、再び吾々の世に來たらぬであらうか。

近代物質文明(科學文明)は百年もつづいた。十九世紀はその全盛期であり、世紀末は文明末であつた。或る國では、物質文明は今やその絶頂を過ぎ、或る國では未だその絶頂にも達してゐない、無邪氣なる人類は、進化、改造の觀念によつて、物質文明の限りなき持續と向上とを期してゐる。短かきが文明の運命である。

「今や物質文明の世は日一日と不安定となり、そして、その終りは見えてゐる」とは「基督教社會學」の最終の一節である。今日は世界不安定の秋である。泰西文明の大伽藍が動搖して、その終末は窺はれてゐる。是即ち白人の世界が有る方面に於て退化停滯し、東洋が再び世界の舞臺に登つて來たことを示すものである。ジンギスカンの時の如く、東洋人が世界に覇權を掌握するといふのではない。私はいはんとすることは、東洋靈、亞細亞靈が復活して來たといふことなのだ。西洋知に對して亞細亞靈が、西洋的自由精神に對して亞細亞的自由靈魂が目ざめて來たといふのだ。然し勿論それは自由精神が尙ほ亡び盡くしたのではない。リツカアトはその「生命の哲學」の非難のうちでソクラテスの言葉を引きいた。曰く「最も深く思惟することが最も深く生くることであるのだ」と。私はそれに對して印度は今日まで最も深く考へられた思想をもつた民族であると云ひたい。

「東洋の二大民族」が、今日再び世界に於ける指導的精神とならんとしつゝある。世界の求むる所は歐羅巴の回生でもなく、歐羅巴の合理化でもない。世界靈が、古き亞細亞を再び求めてゐるのだ。

古き亞細亞へ還れ！ これ世界靈の叫である。基督教初期の歴史を讀め。羅馬の唯物主義は、神秘的、精神的東方文明のために、光を奪はれた。今日もまたその時である。「印度崇拜」の時が再び來た。亞細亞が世界を救ふの時再び來た。

シペングラアの「西洋の没落」を讀め——亞細亞靈が自ざめるの時が來たのだ。

亞細亞の西洋化ではない。西洋の亞細亞化である。西洋の知に對して、亞細亞の靈を呼びさますの時なのだ。物質文明を崇拜しつゝひたすらに泰西を模倣し、利己主義のうちに安息しつゝある人々よ、窓を開け！ 再び慈母の懷に還れ！ 古き亞細亞の人々よ、永き眠りから醒めよ。最も古くして最も新たな大亞細亞精神に還つて西洋物質文明に酔ゆる人類を救へ！

## 明るい世界へ

矢 谷 智 秀

明るい世界に住まう！ 明るい世界に住まう！ それは何んと言ふ氣持のよい言葉だらう。  
視よ蒼々たる天日の下に、生きんとして息まざる草木を！

少く路傍に虐げられた無名草でも、彼等は自己が生きてる限り斷へず、明るい世界へ／＼と伸びて行くではないか。此の生きんとする努力こそは、彼等の本性であり、亦彼等をして有終の美を全ふせしむる力そのものではないか。明るい世界へ住まう、それは凡てに靈長であらうとするものの誰れしもが求めて息まざる所のものであり、亦等しく求めなければならぬ世界である。

然らば夫の明るい世界は何地に造られ、その偉大なる建設者は如何なる人間であるか！ 又奈何なる全能の神であるか。

喜ぶべきかな！ 人類のみあらゆるもく靈長として最も優れたる「思考」の力を、先天的に興へられてゐる事を！

「此の世の外に全く常寂あるに非ず、豈伽耶を離れて遠く菩提を求めんや」と

自己こそ明るい世界の建設者であり、自己の現在生存しつゝある所こそ、明るい世界でなければならぬ。自然界に於ては旭日天に昇りて天空を馳ける時のみが明るい世界であり、夕陽西山に歿すると共に直ちに暗黒の世界となる。然るに吾々人間界に於ては、赫々たる天日のもとに於て、尙闇黒と、諍鬭の世界を築き、唯一條の光線にすら恵まれない坑道の深底にも、自由に明るい世界を見出し得る。

然らば余の明るい世界とは何ぞ！ 又それは如何なる有價値的内容に因つて構成されてゐるものであるか？ 吾々が朝に希望を追ふて歡喜の中に働き、夕に満足に浸りつゝ感謝の念の中に眠る、これが吾々の造り得る明るい世界の凡てである。

心以外に何等の資本も用具も必要としない、「心外無別法」とは此の境の理想か。心眼の力に依つてこの現實そのものゝ中に永劫の相なる理想の寂光土を視る。それが欣求の努力を以つて吾々は現實に働く。歡喜充滿した最も高き理想の信念と希望とをもつて、最も近い吾々の現在、最も深い現實の奥

底を出發點としなければならぬ。

「時」……を如何に最も有意義に使用すべきか、久遠の過去から悠久の未來へ、時は流れて行く。其の世の中に流轉し、生息しつゝある凡てのものは、常に現在と言ふものを所有してゐる。然らば無限の未來と過去との間に介在してゐる現在とは、如何なるものであらうか。

未來を俯瞰すれば、廣漠たる空想や理想の世界が擴がつてゐる。過去を仰ぎみれば、そこには爲して止みたる屍が轉がつてゐるばかりだ。現在に忠實に生活して行く可きだと言ふ人々よ！如何なる事をも、おんみ等が考へ様とする所は未來で、考へ了つた時、それは既に過去である。現在とは「思考」即働きそれ自身である。

現在に忠實であると言ふ事は、未來と過去との否定ではない。現在即働きつゝある「思考」それ自身こそ豎に世を貫き、横に十方を徹してゐるものである。

この「思考」こそ生ける實在である、永劫に生くるものは是實在である。瞬間に永遠を見る。この瞬間の中に然も、未來の輝かしい理想の花があり、亦過去の尊い史的魂がある。吾々がそれを認め得た時、之れに對する欣求の努力、現實の活動こそは、凡て是れ歡喜であり、感謝である。今正に感謝の眠りに就かうとする時、自分が今日爲した行爲を反省すれば、吾々が將に爲さんとする未來の羅針となる。

過去、現在、未來それは我々の作り爲した時の微妙な連鎖である。希望に醒め、歡喜に働き、感謝に眠る。

おと……そこに偉大な明るい世界は築かれ行く。斯くて私は懊惱から歡喜へ、暗黒から光明へと進んで行く。

## 宗教的生命的深さ

竹 多 快 照

靜かに冥想にふける。地球上に人類が生存して以來の儒要に應じて生れた宗教の数はどんなに多い事だらう。それ等宗教の興亡變遷の跡を探究するならば、古今獨歩の優秀なる宗教、或は線香花火のやうに其場限り消ね去つた宗教等千差萬別數限りもないであらう。併し如何に偉大なる宗教でも最初は唯一個人の意識内容の一事實に過なかつた。この事實を言葉または行爲に表現した。それを大衆は耳より眼より己が意識へ受容した。かくて最初証覺を得た人と共通した思想信仰を大衆が持つやうに

なり、こゝに完全な宗教團體が生れた。かやうな過程進路をたゞらずに完成した宗教は今日迄唯の  
も無い。

今や世界に教勢を張つて居る基督教も其の初めはイエスの信仰意識に現れた神の一觀念に過ぎない  
世界的宗教として亞細亞を中心として信奉されてゐる佛教も其淵源を尋ねればカピラ城の一皇子悉多  
太子の意識中に芽萌した一思想であつた。かうした宗教的天才の出現は必然か將た偶然か。大聖佛陀  
を生んだ印度の文化史、イエスを出したイスラヘル歴史は何よりも雄辨にそれを物語り明快なる解  
答を與へてゐる。

必然なる史的背景を作つた者は誰か。これ過去の民衆以外に誰あらう。若し人類に文化を繼續傳持  
する力が欠けて居たら燦然たる印度やイスラヘルの文化も無く、宗教的二十大天才も其發芽以前に朽ち  
果てて了つたのかも知れぬ。釋迦やイエスはあらゆる點に於て一般民衆より優秀であつたと誰が証明  
し得やう。然し彼等は唯一つ到底他人の企て及ばざる卓越性を持つてゐた。そは人間の本然的欲求心  
を見だす力である。

人心の奥底には已むに已まれぬ宗教的要求がある。久遠の生命を得んと欲する要求がある。あらゆ  
るものは無常である。有限である。之に對して常住なるもの、永遠なるものを求めて止まない。この  
要求は自己意識と宇宙と一致冥合せんとする要求であり、神に一如せんとする欲求である。自己意識

の統一を要求する處に生まれた神人合一の境地を如實に見出し、それを如實に表現する聖者の出現を熱望してゐた民衆、これを了知したのは實に大聖釋尊であつた。亦民衆は哲學的に眞理を探究する事より、現世に於て幸福に生活する事が最も緊要切實な問題であつた。この目的遂行に最も必要な人は人倫道德の普及である。茲に民衆は思想上のあらゆる疑問を氷解してくれると同時に實踐的に必要欠くべからざる人道宣傳の爲に身命を捧げる聖者の出現を望んで已まなかつた。

此の瑞雲に乗じて現れたのが、所謂大聖釋迦、イエス、マホメット、孔子、ソクラテス、日蓮等の宗教的哲學的天才であつた。民衆は雲を作り、天才は雲を雨として降らす。民衆と天才の差は是のみである。雲も雨も同一水であり、民衆も天才も同じ人の子である。想ひ茲に至つて生命の深さと人生の眞劍味を轉た思はざるを得ない。

## 微笑

紅梅の音なく散つて宿暮るゝ



村の子に神樂賑ふ豊のあき  
野遊びや女學生徒の喰ひ自慢  
野遊びや子は劍戟の群に入る  
野遊びのはるかに聞きし午砲哉  
飯事の女王椿の首かざり  
桃活けて床に正せし琴の位置  
椿咲く庭に小猫の陽浴かな  
控わめに咲きてやさしき野梅かな  
刈り終てホット一息麥の畔  
先生のなれぬ手付や田植時  
忍び泣く悲戀の夜半や不如歸



## 身延の自然

三 木 淨 達

身延の自然！ 何といふ懐しい言葉だらう。宗祖の御人格其儘に嚴然として聳わてゐる身延の山、吹く風、流るゝ水の音までも皆妙法の調がある。これが身延の自然なのだ。

私は何と云つても、此の身延の自然に心を引かれずにはゐられない。宗祖御入山以來、六百五十五年といふ永い月日は流れた。「日蓮が弟子檀那等は此の山を本として詣るべし」との御遺言に依つて、毎年參詣人は増してゆく、そしてその參詣人の顔は毎日／＼變る。だがたゞ今も昔も依然として變らないものは身延の自然があるのみだ。

今私の眼に映る身延の山や木や草や石、又現在私の耳に訪れて來る風の音や水の流れ、これが其儘に六百五十五年昔の身延の自然なのだ。朝な夕な宗祖の御眼に觸れ、お耳に入り、お心に通ひ奉つた身延の自然よ。

たちわたる身のうき雲もはれぬべし

たへぬ御法のわしのやまかせ

おゝ此の御歌こそ、本師釋尊から日蓮上人の御人格を通じて私等に及ぶ、血と肉とのさゝやきを調べたまひしものである。されば宗祖の御魂も亦永遠に流れて、絶えぬ身延の自然の中に、未來際迄も住み給ひて私等の參詣を待ち給ふのである。

今に即して昔が見ゆる！ 斯う考へて來た時、私は身延の自然に對して、云ひしれぬなつかしさを感じるのである。

今に即して昔が見ゆるならば、私等の心を通じて宗祖の御心に觸れる事が出来るのは當然である。そしてそれは夢でもなければ、決して空想でもない。私等の様な凡夫が……と、云ふのは人間として尤もな謙遜である。が然しそこが信仰の尊い所で、眞に宗祖の信仰に異体同心するならば、どんな凡夫でもやがて宗祖の御心に如同し、本師釋尊と相通することが出来るのである。宗祖も「此法門は二千餘年の當初日蓮慥に釋尊より口決相傳せしなり」と仰せになつてゐるではないか。

概に凡夫の私等が其儘で、宗祖の御心に觸れる事が出来るとの確信を得たならば、あの忍難弘通の鎌倉の巻を去つて、この草深い身延の山に入らせ給ふた御心が判るだらうと思ふ。それは世間で所謂老の身を養ふ隱居生活とは全々意味を異にしてゐるのである。寧ろ身延九ヶ年の御生活こそ「法華經を我得し事は薪こり菜つみ水くみ任へてぞ得し」の御生活であつたのである。

されば人が訪れて來れば法談に時を遷し給ひ、暇さへあれば筆に親しみ給ひて、後の世の私等にも

平等に法華經の光を傳へてやらうとの、有難い御慈悲からの御入山である。故に一度この尊い宗祖の御魂を擁して永久に流れる身延の自然と、永遠に絶わぬ法の山風に接した時、私等の心の荒びは、忽ちに消滅するのである。

あゝ、驚くべき靈格の身延の自然よ！

身延の自然こそは、永久に懐しき私等の信仰の中心である。

## 聖祖御入山を懐ふ

石 井 緑 線

仰げば尊し鷺の山

常に住むてふ峰の月

本地の風光とこしに

實相真如の法の華

天地に咲きて香ばしく

げに寂光の淨土なれ。

宗祖日蓮大菩薩

建長五年の春の日の

妙法蓮華の首めより

救ひの綱どなし給ふ

闇路を照す光明も

三度の諫めも容れられず

夏の初めの半ばの日

處もさむし西谷に

一乗み法の眞髓を

濁り迷へる後の世の

今に榮ゆる有様は

末の世までも留めおき

是れぞ靈山の契りぞと

四季折々に咲く花も

水の流れも鳥の音も

死身弘法のみ教へを

深き御慈悲ぞ尊けれ。

雨と風とにさへぎられ

遂に文永十一年

身延の山路分け入りて。

春風秋雨九星霜

色心二法もろどもに

教への基と示されり。

宗祖大師のみ心を

茲を元もとひに參るべし

仰せられしも理ことわりや。

實相本有の姿にて

吹く松風の音までも

永劫としなへなるそのまゝに

皆妙法のひびきあり。

あゝ、神境か靈境か

來れ人々法華經に

登れ人々身延山

共に集ふてそこしわの

救ひのみ親に跪き

報恩感謝の祈りせん。

## 思ひ出のまゝに

水郷の里にて  
間 宮 夢 覺

昔から佛の山に鬼が住むと云ひます。誰が云ひ始めたのでせうか、佛の山に住む人は悉く佛様のやうに尊いお方ばかりだと深く信じている人々が、あまりに矛盾多い生活を如實に見せつけられて遂に彼等を呪詛したのがこの言葉ではないでせうか、それだけ佛様の恩恵に多く浴し得る人々が、なせ鬼のやうなまるで正反對の生活をしなければならぬでせうか、私は私の得た經驗から思ひ出のまゝに筆を進めてみることにしました。

私が祖山に笈を負ふたのは大正七年の春でした、法喜堂の後の樺の木が新緑に色彩られていましたそれからあの樺の葉が落ち芽を出して又落ちて……同じ變化を八度くりかへしました、そして私共は思ひ出多い延嶽に最後の袂別をおしまねばならなくされてしまひました。

法燈ゆらぐ祖師の前に最後の法味をさくげた時、朝夕跪いた祖師の御靈屋、住みなれた我が學舎、そして見なれ聞きなれた山川草木の總てと、永遠に別れて行かねばならないのかしら、と思ふと胸底よりこみあげて来る云ひ知れぬ涙をどうする事も出来ませんでした。斯うした思ひは、おそらく私人ではなかつたでせう、級友の誰もがやはり同じ涙にむせんだであらう、否、卒業して行つた人も、卒業して行く人の誰もがやはり同じ涙にぬるゝであらう。不平も蟠もない、たゞ不知不識に落ちる涙、淋しいとか、悲しいとか、戀しいとか云ふ總てを超越した涙、有難いとか、忝ないとか云ふ形容はとてめてぬるゝ未だく深刻の涙に……。何事のおはしますかは知らねどもたゞ有難さに涙こぼるゝと歌はれた故人の境地も窺ひ知られるやうに思はれました。

過去に於てそれほごまで感涙にむせんだ事のない私が、なせこんなに泣かなければならぬだらうか、泣かさねなければならぬだらうか、それはあまりに佛様のお慈悲の大きさに甘へすぎたからだ、馴れきつてしまつたからだ、甘へすぎるもの、馴れきつてしまふものは、往々にして中毒に侵されて信仰意識が攪亂してしまふものだ、そして遂には惡道の中に墮ちてしまふのだ。佛様がお示し下され

た御言葉、佛様が常に世に生きてゐると思ふと、汝等は佛の無量深遠の慈悲になれて慍恚の心を生ずるであらう、そして汝等は遂には憶想妄見の網の中に入るであらうと、私は深く味ふ事が出来ました。佛の山に住む奴ばかりではない、多くの人々はランプや電氣に感謝する事を知つてゐるが、お日様に合掌する事を知らない、一錢二錢の恩恵に涙する事を知つてゐても、自分の心に糧を與へて下さる人格者にはともすれば心附かない。免疫素の欠乏している私共はあまりに早く馴れきつてしまふ、あまりに早く中毒にかゝり易い。

甘へすぎ馴れきつてしまふと、私共は往々にして不平不満を抱き蟠ある生活を送らねばならない。佛様が凡夫の顛倒せるとも狂ふとも云はれた、あまりに甘へすぎあまりに馴れきつてしまふと、お慈悲もみ教もふみにじつて全く狂人となつてしまふ、反叛者となり謀叛人となつてしまふ、父母の恩にあまりに馴れきつてしまふと却つて悪心を起して其の父母を殺すものすらある、主君の恩にあまりに甘へすぎると却つて主君を罵倒し危害を加へんとする。

社會主義者が色々の理論の衣に自己のみにくい姿を包んで國家を毒してゐるのも、彼等は國恩に甘へ君恩に馴れすぎ毒に侵されて、身心共に麻痺した結果であらう。勞働問題も小作問題もみんなそんなやうな氣がする。

我等はみ佛のお慈悲に感激しなければならぬ、恩寵の生活を深く味識しなければならぬ、そし



て馴れきつてしまつてはならない、甘へ過ぎてはならない。

みちのくや筑紫のはてにかへるとも

折りくめてよ久遠の月影

これは高田教頭先生が私共の卒業の折、詠んで下された歌です。

自分は一人今叡山に在つてそして鷺のみ山に合掌しつゝ、四明山上高く止觀の月を仰いでゐます。みちのくや筑紫のはてに歸られた級友も、みんな鷺のみ山に合掌しつゝ恩寵の生活を送つてゐる事です。

一九二八、九、九

私が延山を去る瞬間に得た體驗を認めました、意を盡す事が出来ないのが残念です。

## 本妙律師を慕ひて

三 木 淨 達

會て私は醒悟園叢書を讀んだ。それは本妙律師の遺編として、書簡類を集めたものであつた。初め何の氣なしに讀んで行つたが、だんく尊い本妙律師の靈格に觸れ、果ては涙と共に武者振り讀んだ。

こんなに尊い上人がこんなに近くに在つたのかと、熱し易い私の若血は涌かすにはあなかつた。

律師の行跡が僅か五六里の雨畑にある事を知つて、私は近い中にきつとこの村へ行かうと決心した。流れも早い早川の足場危い川岸に沿ふて上れば、憧れの雨畑の村は眼前に迫つてきた。それは至つて寂しい山村だつた。電氣の光も見ぬ、文化の恵みには遙かに縁遠い地だ。

四十軒のこの村より奥にはもう一軒の人家もない。本妙律師の行跡まではまだ一里以上もあるといふ。村の人は私の事を案じて、種々と危険な恐ろしい話を聞かせて、私の心を變へさせようと勉めるらしかつた。けれども私の前に現はれる静寂な岩窟や、清い瀧の音はそんな願慮をば物の數ともせなかつた。あまり人が入らないので、道らしい道とてはなかつた。私は静かに題目を口吟みながら案内者の後に従つた。或る時は危く懸かる丸木橋を渡り、又或る時は朽倒れた大木に行手を遮へざられながら、次第に山深く分け入つた。

山又山の其の間に溪水が落合ふ邊、掌位な平地がある。人跡絶わたり此の地の雜草は優に私等の身丈を没するに十分だつた。偶々訪れ来るものとは、木枝を傳ふ猿のみだと聞く。

五六丈もある岩鼻から雨垂の様な瀧が落ちてゐる。律師の行瀧はこんな細い筈はないのだが訝しく思つてゐた時、この瀧は降り續く五月雨時も、萬物渴して雨を祈るの節も、水量に増減なしとの不思議な傳説を有つてゐるのだと、案内者の話を聞いて、やつと心の謎が解けた。

此の瀧から僅か離れて、大きな石でも破れて抜けたかの様な穴がある。私の感情は不思議に動いてゐた。

「本妙律師荒行の地」斯う書いた一尺餘の木札が此の穴の奥の角に巖かに祀られてあつた。誰がお祀りしたのでらう？ 今は苦さへ生ひて山蟹が……、おゝ勿体ない！

あゝ、隠れたる聖者本妙律師よ、律師が靈は百十餘年後の今日尙力強く輝いて、常に私等の迷ひの心を照し給ふ。然しかゝる人格者本妙律師は唯知る人のみ知る聖者であつた。それは此の雨畑山中の草深い岩窟の様に、容易に人の眼を留めない律僧としての御生涯であつた爲だらう。しかし赫々たる功業は元より律師の望み給ふ所ではなかつた。律師は常に「表具の裏打ちを以て任ずるのみ」だど口にせられてゐたのである。何といふ尊い言葉だらう。この言葉があつてこそ、其の門下に優陀那日輝大和尚や新居日薩上人が出て、今日の宗門の大成をなしたのである、宜なるかなである。

願くば律師愚鈍なる私の上に廣大なる加被を垂れ給ひて宗門有爲の人材となし給へど、心に高く渴仰の叫びを放ちつゝ、涙と共に自我偈を誦じて法味にかへた。

谷に下れば踊り狂ふ水は、大石に叩かれて飛沫雪を吹き、岸を噛んでは奔聲雷を欺き、留まりては魔の淵となる。ひんやりとした空氣がゾク／＼と身体を襲つて来る。水はあくまでも清い、私は此處にかうして居る事をどんなにか嬉しく思つた事だらう。此の谷の流れに會て醒悟園叢書の巻頭に見た

本妙律師荒行の瀧があつた。私は思はず襟を正さざるを得なかつた。

今や名利名聞に腐心して汲々たる宗教家の少からざるを思ふとき、自ら宗門の裏に隠れて萬歳の基を固めやうとされた本妙律師を偲ぶの念更に切なるものがある。

## 七面山へ

吉 田 碧 洞

シャツ一枚に靴といふ輕装に身ごしらへして、七面山へ初の登山と志す。御廟所を過ぎて晝猶暗き杉林の中を脚下に身延川の清流の音を聞きつゝ妙石坊を過ぐれば、いよく爪先上りになる、樹木益々茂つて已に深山の氣立つ。曲折多き道を辿る事時餘にして追分に着いた。脚下は何百丈とも知れない谷、森々たる樹海の盡くる所富士川の奔流あり、宛然身は天界に處するかと思はしむ。少憩汗を拭き、房主志しの甘酒を謝し足を道に向ければ稍廣くして下り道、佐渡の畑野から聖祖着岸の靈地、松ヶ崎へ行く小倉道中宛らであつた。汗一つ流さず却つて涼しさを感じ乍ら赤澤へ着いた。時計は一時すぎても二時には間があるので夏密柑二つ三つ買ひ求めて、皮をむき人通り少ないのを幸ひに頬張り

乍ら足を急がせた。崖の腹に僅かな道をつけてあつたのには臆病な自分は、何んと無しに薄氣味悪がつた。漂々たる春木川に架けた羽衣橋を渡る折は、もしやと思ひ乍らビク／＼して渡つた。いよ／＼山道にかゝると、登つては休み休んでは登り漸くのこと、四十二丁目へ着いて休んで居つた折、御山も近くなつたと見へて、微かに太鼓の音が聞える。其の外時々聞ゆるは鳥の聲のみ……、道で行違つた人も七八人だけだ。法鼓の音に勇み立てられ總門を潜り、大鐘を三度ついて法味を捧げ早速隨身門へと急いだ。前の山は霧が深くて判然とはしないが、山形だけは臙け乍らみえる。然し地理に暗い自分にはそれが何れやら解らないのが残念だつた。

隨身門を下れば七面山の本殿は嚴として構へ、不斷の法鼓は鑿々として響き渡り、おのづと靈威にふれて一種異様な感がした。敬慎院に參籠を願ひ御寶前に法味を捧げて後、夕食を戴いた折は、山海の珍珠も是れ以上のものはあるまいと思つた。御山の靈威とてもいふべきか。

## 天理を訪れて

矢野 鍊 明

今回大阪の岡島伊八氏の篤志によつて舉行された關西見學旅行團廿三名のその一員と

して氏に深謝し、以てこゝにその旅行中尤も感じた事を記してみたい。

我々の目を驚かすあの廣大な天理の信徒宿泊所こそ、天理教の隆盛を語るものであるが、然し我々は唯建物の大小によつて、その宗教の生きてゐるか死んでゐるかを比較して見たくない、少なくともこゝに集ふ信徒の態度によつてこれを觀察したい。

私が天理へ行つて最も感動を受けたことは宗教が生きてをり、そしてこゝに集ふ數千人の信徒の態度が敬虔であると云ふことである。教祖去りてまだ日の浅いせいとも知れぬが、私は嘗て天理を訪れたやうな氣分を味はつたことがない。粗末な淺黃の印袴天を着た彼等は、一日何の苦も訴へず働らく否彼等は衷心からの感謝の情を以て、泪を以て、奉仕の生活を續けてゐるのだ。彼等の生活には無理がない、一舉手一投足これ教祖への報恩を意味する、彼等は仕事をするのではない、仕事をさせていたゞいてゐるのだ。誰でも一度天理を訪れたならば、こゝに信仰の溢れた敬虔な人、感謝の生活を續けてゐる人を見るであらう。あゝ、我々はこゝに何を學ぶ？、こゝに訪れる者は、第一に教義を云々してはならない。數千の男女は信仰は生きてゐるのだ、感謝の生活をしてゐるのだ。彼等には教義の優劣を批判する餘裕を持たない。彼等は信仰に生きてゐる。故に信徒宿泊所の廣大なる建物も、常に白足袋で歩いて汚れず、又實によく萬事が整理されてあり、その事務のよく整頓されてゐること、又三千人も集る甘露殿に傘や下駄を置いて、一回も紛失したことなく勿論間違へのあらう道理はな

い。時にこゝに訪れる西田天香氏も托鉢に来て、その仕事を見つけることなく、空しくかへると云ふことだ、この事實を以てその内容を一般を推察することが出来るであらうと思ふ。

彼等の感謝の生活、奉仕の勞働の結晶は、あの廣大なる建物として生きた手本を我々に示してくれらる。その建物も全國より集る信徒の奉仕により一切が出来上るのだ、他より何者も雇はない、大工も左官も土方の仕事も、皆彼等の手によつてなされる、そして一度その工事に着手すれば、餘程の建物でも旬日にして出来上る、之信仰の力によるものである。我々の目を開いて日本全國の、宗教團體の事業を見よ、かくも生々とした信徒の直接の勞働により、あの廣大な建物を成し得るであらうか、勿論他の宗教團體の人々は、多額の資金を出して、その事業の遂行に努力してくれる。結局その結果は同一であらうが、そこに眞の奉仕的な態度と、敬虔さと云ふものが少ないやうだ。そして一般にそうとは云はれぬか、自己の功績を云々したがつたり、又その爲にのみ努力してゐるやうに、一寸見ぬのは誠に遺憾である。

又辭を低くして「見送らしていただきます」と云ふ言を聞け、我々は不輕菩薩に接してゐるやうな氣がして、反對にこちらから感謝の情を以て合掌したいやうな氣になる、宗教は學ではない。我々の心に潜む佛性はかくして培はれてゆくのだ、無言の說教、無言の教化、云ひ得べくんば彼等こそ、それではなからうか。我々とその教祖を異にし、教理を異にしてゐるが、その敬虔の態度に接するとき

慥に人間が淨化される、宗教を信する者はこの態度が、尤も大切であると思ふ。この敬虔の態度によつて人間を淨化する、これだけでも彼等はかなりの大なる役目を果してゐるわけだ。人を禮讚し得るだけの信仰を持てる彼等よ、あゝ、彼等こそ多幸なれ。

一日の奉仕の勞働を終へて夕の禮拜に向ふ人々、月は秋の野の彼方より靜かにのぼる、平和な而も靜寂の夕である。天理に立ちてすが／＼した氣分の、そして希望にもゆる彼等の姿を凝視せよ、これ實に我々の夢の如くに聞いてゐる、エルサレムの聖地のそれである。我々がこゝに秋の夕の月を見るこれ聖地エルサレムに上る靜寂な泪ぐましい月だ、我々は既に天理の人々の尊い姿を見て上りゆく月を仰ぎ泪ぐむ、彼等は一日の奉仕を終へて同じ月を望める、その氣分に於てどの位の差があらうか、エルサレムのそれを見る私、唯泪ぐましい情に胸は一パイになる、自分は唯口ずさむ

現實のエルサレムあゝ奉仕終へ

月見て集ふ天理の聖地

我々はこの聖なるシーンを見て、何を學びしか？ あゝ、唯信仰、信仰、信仰こそ最も幸福なる世界を創造することが出来るのだ、我々には日蓮聖人の信仰あり、その信仰に生きる、これ多幸と云はずしてどうしやう。私はこの天理を去るとき、どの位愛着を感じたか、そうだ、自分は慥にこの聖なるシーンを、自己の信仰にひき戻し、調和し、同化して見てゐるのだ。自分はこの聖なるものとして、



自分の眼にうつるその陰の醜は見たくない。あく迄も直感したその感を失ひたくない、永遠にそのシンを思ひ浮べてゆきたい、そしてそのすがくしい気分で自己を淨化してゆきたい、自分は二度と訪れて、この清い感情を毀したくはない。

甘露殿に入れば黒い姿の彼等は、各自敬虔な祈りを捧げてゐる、數千人のひれ臥す態度、それは形式的のものではない、感謝の溢れがその態度に現はれたのだ。多額の運動金を費し、多くの人々の口から、泡を飛ばしての説教よりも、この場面を見る方がどの位感化を受けるか知れない、鼠算の信徒のつくり方も、こうした人によつて行はれるかと思ふと、その偉大なる力のあることが首肯される。その簡單なる儀式は、忙しい社會には非常に適合してゐると思ふ、而もその儀式で充分に祈りをささげることが出来るのだ、この点に於ては日蓮宗としても、大いに學ぶところがあると思ふ。

私は以上述べてきたやうな、感を他の寺院に参りて味ひ得なかつたことを一面淋しく感じた。新興宗教の隆盛期に當る天理教が今後如何になりゆくか、又吾々としてこれを如何に見るべきか等を考へつゝ表に出ずれば、月は天理の人々を祝福するものゝ如く、空に懸つてゐる、その月光の下に私は自己を凝視し、天理の月を再び見た。未知の人は「見送らしていただきます」と云つて見送つてくれた我々は天理の人々に何と感謝しよう、私は限りなき愛着を感じながら月を見、うなじを垂れて歸路についた。

## 鮮支旅行記

方 哲 源

數年來の宿願である兒童連れの鮮支旅行の念は止み難く、自己の力なきをも省ず、よき先師日持上人の精神に學び、大膽にも支那、朝鮮、日本兒童等の間に美しき隣國の友人であると共に、東洋の兒童たる事を自覺させ、相互の意志を交換せしめ、尙日常生活に於ける細事までも相互に了解し得て、同根枝葉の眞義を永久に持續すると共に、東洋人の永遠な平和を建設す可き新しき生命とも云ふ可き可愛らしき兒童の熱い握手により、親善を計る可く、暑中休暇を利用して、幼き田村皇富士(十三才)君を連れて目的地たる鮮支に行く事に決心した。

私は靜かに兩手を合せて、御祖師様に途中安泰を祈りつゝ身延山を出發した。

x x x

七月廿二日それは靜かな朝だつた。

大勢の祖山の學兄達に見送られて車中の人となり、富嶽を後に残して廣島へ着いたのは朝の四時だつた。渡部氏や中村氏等が迎へに來て呉れた。直に電車で保育園に行つて、川本先生等に迎へられ、特に私達の爲めに茶話會が催され、私達の身延山の話を始め諸先生の宗教教育に關するお話を園内生徒

達は大變満足げにきいてゐた。それから有名な巖島や羽田動物園とそれぞれ市内名所を一日中ゆつくりと見物して、又皆に見送られて下關行の特急にのつた。

ねむりの中に下關へ着き、他の客と共にすぐ釜山行の連絡船にのりかへる。船は静かな波の上を苦もなげに滑る。エンヂンの音が喧しくなつて來ると同時になんだか般室にゐるのがいやになつたので甲板に飛び出した、静かに寝むれるが如き海上の遙か向ふに走り行く一隻の商船を發見した、蒼空には美しい群星が耀いてゐる、淋しくも一人甲板に立つて遠くから溢れ寄する静かな波を無意識に眺めてゐた、波は次第に荒く船の横面にぶつつかる、私はあつちこつちに轉がされながらふとこんな事を思ひ出した、基督がカフナウムと云ふ所の海邊に於て眞の道の爲めに海上を陸地の様に歩いた事、それから日蓮聖人の波題目の事を思ひ出して批較して考へて見た。

その内船は波靜かな釜山港に着いた。港頭には李君を初め、大勢の子供達は兩手に美しい旗を持つて、熱狂的に異郷の友田村君を迎へて呉れた、それから李君の案内で市内を見物して、午後四時頃基督教會の日曜學校で童話會が開かれた。田村君のもつと少さかつたときの話や現在の日本兒童の教育に就いての感想を李君の通譯で話し終ると金英玉嬢の歡迎獨唱があつた。

翌朝七時に天真爛漫な子供達に見送られて大邱、太田等の都市に於ても同じく子供達に熱心に送迎されて、懐かしき三百年の王都であつた我が故國の首都京城に着いた。

プラットホームには我が幼き友金泳植君を初め、方夏容氏と、貞信女學校の先生達と、又日曜學校の生徒は驛前に隊を作つて私達を迎へて呉れた。それから一同は特に田村君に對して萬歳三唱をして私達はすぐ電車で方夏容氏宅へ行つた、方氏は喜びの餘り、暑さも忘れて私達の爲めに自分自ら案内役と定めて、市内外の有名な諸方面を案内してくれた。氏は資産家で又社會事業家であるから本當に理解ある人だ。此の間、特に面白かつたのは各教會經營の日曜學校に於ける童話會に招待された時の事だ、天主教の孤兒院に行つて、田村君が日本の話や、特に身延山のお話及び日本人の生活状態なんかを話す時、孤兒達は日本語を知らないから朝鮮語でやつて呉れなければ私達は一つも面白くないよと言つてゐた。丁度その時、金泳植君が流暢な朝鮮語で孤兒達に田村君のお話を傳へてやると、皆なすかつり喜んで兩手を舉げてもつと澤山面白いお話をして呉れと騒ぎ出した。その内中央日曜學校々長が迎ひに来てくれたのですぐ皆とお別れをして、自動車で中央日曜學校へ行くと、百餘名の兒童は私達が來るのを待つてゐた、校長先生は靜かに聖殿の前に立つて童話會の爲めに簡單なお祈りを捧げそれからアメンと共に面白い童話會が盛大に開かれるや、歓迎の兒童等のコラスがあつてすぐ多數の兒童中から歓迎の辭があつた、それから田村君のお話を金君の通譯で終ると、東洋兒童の將來と云ふ題の下に、貞信女學校の先生方信榮女史の一場の講演があつた。その他に記す可き事が澤山あるが紙數に制限があるので畧す。特に感謝しなければならないのは、今回私達の爲めに方氏の如きは、精神

的の援助は云ふ迄もないが、物質的に於ては旅費半分以上方氏の援助である。京城に於て招待された順序は眞信學校側、於中央青年會館食堂、中央日曜學校側、於食道園、有志者間、於東亞食堂。各個人家庭に招待された順序は、方夏客氏、金俊龍氏、李貞淑嬢、金泳植氏、玉吉科氏（中國人）、濱田豐子氏等である、ここに記して感謝の意を表しておく次第である。

それから南山公園内の朝鮮神社に參拜し、次に動物園を見たが、之等は實に東洋第一と稱しても恥ずかしくない位だ、又博物館中に於ける古代高麗の佛教遺物の如きは實に立派なものが澤山ある、その中特に目をひいたのは法華經に關する書籍と佛像であつた、かうした歴史的事實を持つてゐる古代の朝鮮佛教が、今日の如き沈衰状態に至つたのは實に悲しまなければならぬことである。

元山は昔から有名な要港であると同時に本當に景色のいい所だ、美しい白砂は十里に及び、白い帯を長く引けるが如き海岸には繁れる赤松が點々として立つてゐる、その間を桃色の海裳が點綴して柔かい氣分を添へる、實にかうした景色は元山港の誇りと言はねばならない、此の自然の母の膝に甘へて遊ぶ海水浴客はかなり賑やかだ、名砂十里白砂場を通つて金剛山行の自動車は、まるで戦争の氣分を現はしてゐた。舊友李昌善君と名石洞子供達は、面白い日曜學校の旗を持つて迎ひに来て呉れた。そして、李君は相變らず元氣で僕の手を力一バイ握りながら、「會場は教會にしました」と言つて、それから大勢の子供達と一緒にしやぎながら教會へ行つた。教會には最早や大勢の子供達は私達が來

るのを待つてゐた、子供好きな李君は流暢な日本語で田村君に面白さうなことを何か言つてゐた、その内開會のリンがなるや、李順玉嬢のオルガンの演奏と子供達の歡迎合唱が始まる、田村君は感想談を私は將來の日鮮兒童と云ふ題の下に講演をした。

咸興、端川も、矢張り同じ歡迎の内に暫時立ち寄つて子供達にお話をした。

城津は數年間厄介になつてゐた土地であるからいかにもなつかしい氣がる。けれども七八年前よりは随分様子が變つた様にも見ゆる、舊友申鉉道兄に會つて來意を告げたが、不幸にも昨年火事にあつて小學校は全焼されたさうだ、その上、只今は暑中休暇であるし、又城津は先天的に宗教的方面には恵まれない故、宗教的色彩ある集合は歡迎されないらしいから童話會は止める事にして、申兄と共に城津公園から沈靜かな夕暮海邊を散歩した、呂同春兄の如きは胸襟を開いて將來の佛教に對する希望案を述べて下さつた。特に申兄に感謝するは田村君の植物標本の爲め非常に努力して呉れた、その外澤山のお饑別も戴いたことだ。

臨溟市の普通學校の生徒の如きは、田村君が日本にゐる時から相互に手紙の交換まであつた故、因縁が深い所だ。朴完實君と、嚴四月君、其の外大勢の兒童達は眞心から私達を迎へて呉れ、すぐ果樹園から廻つて男女の生徒達に迎られて學校の方へ行き、愉快な談話會が終つて後庭球會が始まつた。それから午後二回も先生と生徒と一緒に記念撮影をした。

威興から一緒に來た李君は本當に面白い人だ、私達の爲めに三日續けてお伴をして下さつた。

加藤清正の朝鮮征伐で有名な會寧迄來た、不幸にも昨日まで大雨が降り續けたので私どもは本當にお話にならないほど悲惨な状態だつた。舊友尹逢春君は十五六人の小供達を連れて迎ひに來て呉れた喜びと共に普興小學校へ行つて大勢の生徒と先生達に迎へられて、田村君の通譯で身延山のお話やら南鮮方面の感想を述べた、それから金玉順嬢と尹英和君の歓迎の合唱が終つて、先生の自邸へ迎へられて御馳走になつた。

いよ／＼朝鮮北方に於ける最後の大都會である會寧とは別れなければならないが、大雨の爲めに支那の鐵道は全然不通となつた、けれども切角の旅行であるから引き返へすのも残念だし、積極的に兎も角も行ける所まで豫定日割の通りに行つて見る事に決心した、そして尹君に支那の馬を頼んで田村君は馬に乗り、私は歩いて晩の十二時頃に上三峰と云ふ所へ着いた。朝七時頃に起て見れば、はるか川向ふには平和な支那の山川が見え、そののんびりした野原には可愛らしい一群の小羊も見え、又支那の有名な高粱田も見えてゐた。十時頃私達は國境守備巡查に渡江検査を受けて、すぐ橋を渡つて支那の國境へ行つた所が矢張り同じ様に支那の國境巡查も渡江者を検査してゐた。圖們驛へ行つて見た所が全然開通の見込みがないと云ふから仕方なしに驛前で開通するまで待つ事にして、毎日支那の商人達と將棧や談話會で暮したが、四日目に始運轉車が六道溝市まで行くと云ふからそれに

乗つて六道溝市まで行つた。そして恩人である所の光明會主幹日高丙子郎先生の舊邸を訪問したが、先生は光明會の用事で本國へ歸られた後であつた、本當に先生がいらつしやらないのは今回私の旅行に取つては實に遺憾である。そこで先生の代理崔斗南先生を訪問して來意を告げたが、先生は厚意を持つて迎へてくれた、それから先づ先生は光明會の社會事業の説明及び案内をして下された、日高先生が北滿州の雪風と二十有餘年間寢食を忘れて惡戰苦闘したその結晶が即ち光明會である。光明會の趣志は即ち「人道の闇を照らし、東洋の燈を掲げ、教育、産業、信仰の充實せる極東の丁抹、東方の端西を白山黒水の間に建立し、以て東亞の泰平を守護せんとの祈願の下に、鮮支同志た相謀り、日支當局の許可を受け、當地に光明會と申すを發起す」と云云。

光明會の事業は教育、農業、工業等である。先づ教育機關としては、幼稚園、小學校、中學校、師範學校、半日學校、女學校、語學校等である。その他、光明農園、光明牧場、光明紡績社の如きは實に立派であつた。かうした大事業を一個人の力に由つてしかも如斯隆盛に至らしめたのは、實に日高先生の超人的人格によるものであると思ふ。崔先生はその他市内外の名所までも親切に案内して下され、お蔭にて悉く見物する事が出來た。その内特に印象に深く残つてゐるのは支那人の小學校等に行つた時のことだ、成城小學校の如きは實にすべてがよく整つていたし、その教授方は本當に内地に於ても見られない位の所もあつた、その中で習字と圖書の如きはまるで美術學校へでも行つた様な感じ



がした。先生達は誠意を以て私達を迎へてくれた、そのみならず、崔先生の通譯に由つて、今日の様な日支兩國の立場にも關らず、斯様に日支兒童間に面白い談話會が開かれた事は實によろこばしい事であり、私はこのシーンを如實に見て思はず感謝の涙にくれた。

それから職員室に於て支那の有名な御茶を戴いてから、學校の前で先生達と一緒に記念寫眞を撮つて後御別れした。私は田村君を連れて東山の基督教側の主催に由つて開かれた日曜學校大會に参加した所が、幸にも小學校時代バイブルの受持であつた梁英哲先生に十有餘年目ではつたりあつた、本當にうれしかつた。それで私は現在日本に於ける教育制度と日曜學校等の近狀を話した。それから晚餐會が終つて旅館におちついたのは六時頃であつた。二ヶ月の長雨で汽車は全然不通であり、その上、支那の土は全國的ではないが粘り氣があるので自動車も動けない、かやうな場合に子供を連れて歩くのは非常に危険であるから、光明農園を解放していただいて、田村君は毎日果實園に行つて青木君や、又他の支那の子供達と一緒に遊ばせていただく事にして、私は一人で局子街市まで馬車にのつて行つた。柳容熙氏に迎へられ、市内有名な支那の道立師範學校を初め、各教育機關を見學し、又柳氏達の教會の經營である日曜學校に案内され、五十有餘名の生徒達に迎られて、「東洋兒童の覺醒」と云ふ題の下に約一時間ほど面白く話した、それから二三の舊友達の歡迎會へ招待され本當に面白くあそんだ。此處に於て特に述べなければならぬのは、六道溝市は北滿州に於ける帝國の總領事館の所在地

であると共に、日本歴史上に新しき光明を興へた地である、又加藤清正の朝鮮征伐を普通は會寧まであると言つてゐるが實はさうでない、それは北滿州に起居する事二十有餘年間の直接經驗を持つて居られる日高先生の研究に由れば、加藤清正が朝鮮征伐の時は、六道溝市まで來て更に高子街市方面までも進軍した形跡あるとの話した、その證據品としては當時加藤清正が用ゐた所の劔一振と、釜一個は現在當地總領事館に保管されてある、故に此の地は其の昔から日本人とは深い因縁がある土地だ。特に崔斗先生の詳細な説明も拜聽したので疑ふ餘地なきを信ずると共に今回先生に多大な物質的援助を受けた事を眞心から感謝する次第である。

いよいよ開校も近づいて來るし、長い旅に疲れたわけか、なんだか身延山が戀しくなつて來た、八月の二十五日の靜かな朝七時、崔先生を初め、尹水晶嬢及び青木靜子嬢の兄弟達以下大勢の子供達に見送られて、印象の深いこのなつかしい地を後にして歸へる事にした、汽車が動き初めると共に大勢の子供達は泣きながら聲をかけて、田村様、又いらつしやいね、そして連發的にさよなら〜と言つてゐた。自然でも別れをおしむ。私はかうした白紙のやうな純な赤兒の衷心から湧出する此の美しき情に包まれて泣かすには居られなかつた、彼の基督が言つた「赤兒の心こそ神の國を見る事を得べし」と、實に聖言であると思ふ、僅か一週間前に知りあいになつた異國の友を涙を以て見送つて呉れるは實に美しい兒童の心である。私達は云ひ知れざるよろこびと愛着の心を抱いて、八月二十九日午後六

時半に下關へ着きすぐ身延へ向つた。

## 近況十首

山深かき冬の夜こそ悲しけれすぎましわれの省みられて

山寺の鐘の音空にひびくらし山の端出づる夕月ふるふ

唯一人野に立ち出でゝ思ふまゝ泣きてもみたきわが心かな

やるせなき心抱きて夏の夕べ暮れゆく丘に口笛ふきぬ

ゆく春の岡べの道を歩みつゝ幼き兒等の草笛きくも

草にねてしみく／＼仰ぐ空の色藍ふかふして心なごめり

水すめる川のほとりの草にねて瀬の音かそけく心にきこゆ

雨去りて群がる雲のひま／＼に青き色見る心うれしき

梅雨霽れの明るきひるの天空を白雲流る脚連ねして

黒崎與志雄

人をさけ山里歩くこの頃の我はも淋し友あらなくて

琵琶歌

悲曲  
『涙の光』

帝都に近き片田舎

柱傾き壁落ちて

寢床に眺む月も亦

春は観花の樂みも

夏の緑りの滴たりも

秋風野邊に立ち初めて

冬の寒さも厭はれず

可細き腕の乙女子よ

花の盛りも早や過ぎん

見るもいぶせき賤が家に

鳴く虫の音は哀れなり

雨の漏るゝも何かせん

知らずに過す乙女子よ

流汗瀧の苦みも

月の眺めも涙そふ

雪に轉びつ日を送る

めぐり／＼て小車の

五ツ年せ前に父上は

吉田孝秀

遠き彼の世の旅の空

早くも越ゆる三途川

石をば積みて戯むるゝ

死出の旅路も何時しかに

過して今は兜卒なる

母は病の床に臥し

只感涙の外ぞなし

順な乙女の赤心は

靈驗如何で空しかる

都に學ぶ傍らに

朝な夕なの苦しみに

戀し懐かし慕ひつゝ

母の病氣や妹の

泣くに泣かれぬ血の涙

人に後るゝ例しなし

佛菩薩たち尋ねつゝ

賽の河原や地藏尊

嬰子の群を横に見て

鬼の攻苦や針の山

彌勒の許に法を聞く

愛し我子の給仕には

優しき看護に日も足らむ

天地の神に魂あらば

力と頼む兄上は

新聞賣りや牛乳の

思ひは遠く故郷を

自が苦學も忘れ顔

苦しき思ひ胸に込み

かゝる内にも歳月は

燕や雁の訪ひ去りて

三年が間夢幻

勇み勇みて郷關へ

其の喜びは如何ばかり

嬉し涙の溢れつゝ

此の喜びを分たんと

急げば早し我家なる

歸れば母や妹は

嬉し涙は咳込みて

やがて母上顔を上げ

如何に喜び給はんと

思ひは愚痴と化するなり

側の見る目も羨まし

貧乏しき中にも輝くは

清き親子の情愛ぞ。

今や日出度き卒業に

錦を飾り歸る身を

隠せど色に現れて

寸時も母や妹に

汽車や電車はもどかしく

戀しき家を訪れぬ

袖と袂に取りすがり

暫し言葉もなくばかり

無き父上のいましなば

嬉しきに付け悲しきに付け

優し母子の情愛は

朝日の露に潤ふごと

清き親子の情愛ぞ

## 除夜の鐘

月さね

風むせぶ

墓掘る音が

どこからか聞わてくる

髑髏が出た

三四十年位のが

そこには誰の墓標とも

知れぬこけむした

ちつぽけなのが轉されてある

又音がきこわてきた

鍬の音

矢野錬明

## 土の音

これ人間の最後の音楽である

社會から永久に忘れられた墓標

そは人生の未來をシンボルするものだ

人間は自己に生き

社會の爲に働き

そして死ぬ

その最後は唯グレーブ

この音楽と共に消ね

このグレーブストーンとして

永遠にすみへ轉されてしまふ

一年の最終を告ぐる除夜の鐘になる

人生の最後を告ぐる墓堀る音が聞わてくる。





## 感謝

福士泰量

静かに静かに平和を告げる

久遠寺の夕暮の鐘の音が響き渡る

破れはてたる御法の服と

質朴な生活に満足する自分は

完結された今日一日の使命を

佛祖に感謝し

敬虔な祈りを捧げる

そして又明日の幸福を

佛祖に祈るのだ

微笑んだ同寮のK君の顔は

愛と尊嚴さの

佛の色相が寫つて居るぢやないか  
さあ歸へらうよ。

## 短歌

□卒業生を送りて

八とせを學びて君よ去らるとも忘れ得まじな鷺のみ山を  
世にいつる君よみ法につくされよやがてつゞかん若き吾等も

□更夜の郊外

人たへて月さむしろの郊外をいづこに行くやチャルメラの音

□田舎の夕景

夕陽をあびて遊べるおさな兒らもろ手をあげつ汽車を送れり

石井緑線

## テニスして

歩 牛 生

ほの熱く照した太陽は、微風に流されてゐる白い雲に被はれて見えなくなつた、そしていつまでも出て來なかつた。後は涼しく氣持よい運動日和になつた。僕はS君と庭球を始めた。日も照らさぬ静な庭に深い緑の香りを受けながら白いラインを左りに右に、ポン／＼／＼ラケットを振廻すことはなんと爽快な極みであらう。僕等は下手だ。よいサーブもスマツシングも出來ない。一度見舞つた球は再び歸つて來ない。然し僕等は愉快だつた。眞劍だつた。手と足と、そして身体全体をあぶなげに曲げながら白いラインに注意してあの小さいやな球に全身の力と精神をこめて打つのであつた。然し々々無慘や！その球はネットに妨げられた、又ラインを越えては向ふへ飛んで行つた。僕等はどんなにかそのネットを恨むたであらう、ボールの飛むで行く方を見てはラインの狭い事をかこつただらう。然し僕等は屈しなかつた。そうすればする程力は以前に倍して運動は續けられた。今や僕等は庭球することより他には何ものもなかつた。そこには勝負の見苦しきは微塵もなかつた。僕等のテニスすること、それは本當に清らかな純なるものであつた。彼の古のギリシヤのモットーであつた「健全なる

肉体に健全なる精神が宿る」とは又我々のそれでもあつたから。

人々は嘲つた。それでも僕等は止めなかつた。力の續く限り。やがて疲れた身体を深い緑の下に横たへ流れ行く雲を望めながら「身延の山は千早振る」と聲高く歌つた。空飛ぶ小鳥も我が歌に和して囀へづる様だつた。

おく愉快！ 愉快！

我等は自然の子

自然のひざに

自由に遊び

自由に延びる

本當に幸福だ

## 詩

黒崎 與志雄

弱きものよ……。

□心の囁き

□弱きものゝ歎き

自分の言葉

眞實なる心の囁きを

ことごとく否定する人よ

(たとへそれが悪意を含まないにせよ)

私はお前に勝てない

お前は強者だ

救ふべからざる絶対の強者だ

お前をにくみ、恐るゝ前に

先づ自分の心の弱さが歎かれる

強者よ

お前に反抗して立たうとすると

涙に先立たれて

私の昂奮はもろくもくちかれて了ふ

あゝ

x

つまらない事ではあらう

だけれども

俺がするまでは

君もしなかつた

x

馬鹿野郎と

吐出すやうな大声で

ごなりつけたあとの、その後の氣持

x

盲動と徒勞の外に何がある

この人達にしてゐる仕事に

x

晝だから晝飯を食ふ

さういつた

習慣に生きて平氣なものだ

あしたから ×

あしたからだときめてゐる

何時になつても來ないあしたを

×

何時かは死ぬ

このきまりきつた事柄にも

死ぬまぎはまでは驚けないものか

×

屈従と妥協の中に人間の

安心を求め、生きやうとした

×

そんな事、氣にかけるなど

思ひながら

やつぱり、いつか

氣にかけてゐる

×

本當に自分自身を思ふとき

なつかしくなる廣い周圍だ

×

つくづく思ふ

この人間の各自が持つ

自信と云ふものゝ價値の如何を

×

自分のことを自分でするんだ

いまさらに

意味あたらしく考へて見る

×

たゞ自分は自分のことをしたらいい

さうきめて、やつと安心する

### □ 忍 従

忍ばう、凡てを

のゝしられても

打たれても

蹴られても

涙を流して

すべてを忍ばう

野では踏まれた莖が  
やつぱり笑つて  
咲いてゐる

家では打たれた弟が  
打つた兄貴と遊んでゐる

我等も耐へて耐へて  
のゝしられても怨まず  
踏にじられても怒らず  
凡てを忍ぼう  
やがてにつこり  
佛になるんだもの

これ計りの事で  
瞋恚を起して  
地獄なんかに  
落ちてたまるもんか

自分が黙つて忍べば  
幾人かの不幸なるべき人達は

救はれるんだもの  
おゝ、そうだ

忍ぼう  
最後まで……、

□祈り

祈り！  
眞實な祈り

かたちに對つての祈りではない  
祈りがかたちを生むのだ  
無から有が生ずるのだ

かたちのみを探ねる人には  
寂寥と悲哀とがある

おゝ吾が祈りよ！  
うれしき祈りよ

獨り人なき室に  
 涙と共に祈るとき  
 あゝ人間の世界に  
 これほど悦しい事が  
 ほかに又とあらうか

我にうれしさ  
 祈りあり  
 朝なく  
 夕なくに



## 童 謠

### □ 天上と下界

廣いく空の中  
 雲と雨とが手をつなぎ  
 舞つたり跳つたりをどつたり  
 下界の人々大さわぎ  
 傘をさしたり合羽をきたり  
 狭い小路を急いだり  
 下界と天上とはあべこべだ





曲 戯

或る男の信仰の巡査

木 村 鍊 戒

子 (ハーモニカを吹き乍ら歸つて来る) 只今。

母 今日は大へん長い散歩ね何處まで行つたの。

子 西谷から、本山の庭を通つて來ただけど、いつ行つても思親閣や鷹取山の夕景色は美しいのね  
ねわお母さん、甘露門を出ると少し坂でせう。

母 どうかしたの。

子 あの坂の左の方で犬がとて、遠吠してゐただけど、何にか變つた事は無いでせうか。「お父さんはまだ?」

母 小さな事が出來て今出かけた處なの。

子 いやだなあ、こんな小さな村によく事件が起るんですねわ。あれお父さんが又何にか引ばつて來

た様だ。

(巡查青ざめた或る男を連れて登場、母子急いで次の間に入る)

巡查 中へ這入れ

或男 (無言のままうなだれてゐる)

巡查 コラツ、這入らんか、ふるわてゐるぢやあないか。

(或男無言のまま這入る、巡查も入り座敷へ上る)

巡查 サ、上へ登れ。

(或男躊躇しながら澁々上る)

巡查 君はどうしても死にたいと云ふのか。

(あはたぶしく電話の鈴すずが鳴る)

巡查 (電話口にて) ア、さうだ……。大丈夫ここに居るよ……。おい／＼来るな来るな。

(或男無言のままうつむいてゐる、双方共しばし無言)

巡查 なあ君、君の死なうと云ふ其の心に、僕あ感心したよ。然し誰も一度は死ななくてはならぬと云ふことを心得てゐるだらうな。

或男 ……ハイ。

巡査

そしたらもう少し眞面目に、眞剣に考へてみ玉へ。親から與へられた此の有限の人生を何うして一番有意義に、そして生き甲斐ある人生にするか。そこだ君、僕は死の爲に死を考へろとは云はない。(だんだん聲高くなる) 人生の死その「死」を正しく理解する事に依て、正しい「生命」の手縛が得られるんだよ、日蓮上人のある時の言葉に「先づ臨終の事を習うて後他事をならうべし」と云はれてゐる。何だつて君はあんな薬を買に行つたんだ、死んだつて別に佛様は罪を許しては呉れないよ。(或男益眞面目に一言一句漏さじと聞き入る) これあ僕の懇意の坊さんの話したが、如何に過去に罪障があつてもあくまで正直な信仰と、熱願とが有つたならばきつと罪障は消滅して、反對に佛様は幸福を與へて下さると云ふ事だ。君の死なうした刹那の心、その心を信仰の方面に向けたらごうだ。さうすると必ず母親も安心するよ。(言ひ終ると) 愛子「お茶一つたのむ」

或男

ごうも有難うございます、始めてよく解りました。これからは眞面目に必ず立派に生きやうと骨を折りませう、よく解りました、有難うございます。

巡査

さうだ、立派に生きる爲に佛法を信じて佛様のみ教を仰ぐ事だ。よく解つて下れた。(巡査快心の笑を漏らす)

或男

檀那、お袋は正直でよく信心してゐるんだが、ごうして子は亡くなり妻は述げるやうな不幸が

起るんでせう。

巡查

そこだ、その心が純真であるほど、一培多くの苦惱を引き受けるのが此の世の矛盾した定めなんだ、信仰はこの苦しい世界を切り拓き、曲つた生活を叩き直す苦しい努力なんだ。さうして其の苦しみと同化して苦を怖れなくなつた時、本當に安樂の世界に到達する、それが日蓮上人の示された「現世安穩」の世界なんだよ。

或男

ああ有難たうございます、ようく解りました。(喜びの色顔に溢れる)

巡查

愛子、すまないがお茶をもう一つさして呉れないか。(或男に向ひ) どうだ君、これから三門へ行つて正道に這入つた報告をしたらどうだ。一所に行かう。

或男

どうも大變御手数煩はしました。どうかそれでは一所に御願ひ致します。

巡查

ぢやあ行かう。(二人立ち上る)

―を は り―

# 佛様ご道すがら

田代 静山

凡夫 もう私はこの世に生きて行くのが、苦して厭になりました。生くるに必要な、求むるものが得られない爲めに……。いつそヒト思ひと思ひますが、死ぬことすら罪業の深い奴で許されませぬ。ごうぞ、この私を御救ひ下さいまし……。

佛様 御前も苦しいか、いやわしも苦しくて／＼てならない。

凡夫 ヘエ……。苦しむのは凡夫ばかりと思ふておりましたのに、では、やつぱり佛様にも苦しみはおありでございますか？

佛様 あるとも／＼。お前たち一切衆生が救はれてくれねば、わしは夜も安樂には眠られぬ。お前達の罪苦のうめき聲が、澄みきつたわしの胸に響い來て夜る晝なしにキリ／＼と痛む。

凡夫 あれまア、そんなにお痛みでございますか。

佛様 痛い／＼、子供は、子供一人分の苦しみで濟むが、十人の子供を持った親は、十人分苦しまねばならない。一切衆生の罪苦を背負ふてゆくわしの苦しさは又格別ぢや。一刻も早く救はれて

くれ頼むから。頼むといふのは本願だ、本願といふのはわしの願ひぢや、わしの頼みぢや。

凡夫 頼みとは勿体ない。ハテ如何うしたら救はれるのでございませう！ その手續は！

佛様 孤兒院ではあるまいし、願書も手続きもいるものか、さアト思ひに、わしの懐へ飛び込め、

飛びこんでくれ、さうすれば無條件で救つてやる。

凡夫 と仰しやつても、どうしてもこの苦しみが退けられません。取れません。

佛様 困つた奴ぢや、仕方がない、苦しみを背負ふたまゝで飛び込め。

凡夫 はア。ワン、ツウ、スリ！ さア飛び込みましたぞ。

佛様 ヨク来てくれた、何んど樂になつたか！

凡夫 ねエ佛様、相變らず苦しうございます。

佛様 ハテナ、そんな筈はないが、ドレ〜お見せ。

凡夫 佛様……。

佛様 アハ、。何んのことぢや、お前は汽車に乗つてからも相變らず荷物を背負ふてをる出舍者み

たいに、わしの懐へ入つても矢つぱり苦しみを抱えてをるのう、それではいつまで経つても

苦しきは抜けまい、さア〜遠慮はいらぬ、わしが代つて荷物を運んでやるから、その腰掛に

かけなさい。

凡夫 私もさつきから、さう思つておりますが、何んとしてもこの苦しみが離れません。

佛様 ははア……成る程、お前の苦しみは、瘤のやうにコビリ着いてる。これは前世の業報といふ奴ぢや、人間の相すがたとしての約束ぢや……。

凡夫 佛様のお力で、取つて下さい。取れる見込はありませんか。

佛様 取つて遺るに譯はないが、お前は未だ浮世の樂のしみにあこがれてる。そしてこの瘤は樂みの種ぢや。その大切な種を抜き取つては却つて不憫だから大切にかついでゆけ。

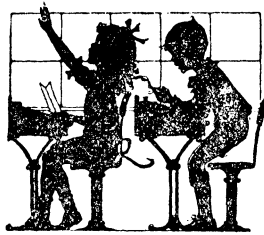
凡夫 どうも重苦しくて堪へられません。何んとかして、樂しみはそのまゝに、この苦みだけ抜いて頂けませんか。

佛様 さて〜我がまゝな奴。苦樂といふものは一ツの兩端だ、さう旨い具合には行かぬ。よし〜斯ふして中味をかへてやらう。

凡夫 おや不思議やな……。同じ苦しみの姿であるのに、この輕さは何んとしたことでございませう。

佛様 さればぢや。今までお前は自分獨りの樂しみを得る爲に苦しみをかついで居たが、それをわしの持つてる苦しみと入れ替へてやつたのぢや。そしてわしの苦しみは衆生を救きたい、一緒に生きて行きたい一念の苦しみぢや。衆生救濟のためには地獄のドン底に墮ちても退ひせぬのが、

わしの大道ぢや。おまへも今日から衆生救済の苦を背負ふて居るのだと知るなら、その苦しみのその儘が楽しみとなるであらう。衆生と共にく幸ひに生きて行くのが佛心ぢや。佛心とは衆生を助けたいと言ふ心のまゝが佛心ぢや。おまへの行く道は生佛不二凡聖一如にあるのぢや。同じ苦患の身体が三毒充つばいになつて居れば苦しい、佛心が満つれば風船玉の様になる。解脱の一路はここにある。







## 編輯後記

本誌の投稿者の少なく、且意外に発行が後れたことは甚だ遺憾である。この投稿者の少ないと云ふことは休刊してゐた關係かも知れぬ、次回発行の際、本誌に数倍したものが出ることを、本誌はそれだけでもかなりの目的を達し得たことも云ひ得る會員諸君の努力と後援を望む。

本誌發行に就いて高田、丸山、永倉、松木、渡邊の諸教授の多大の援助を蒙つたことをここに記して深く感謝す。



## 同窓會々報

庶務部から

四月二十四日昭和三年度の幹事選舉は開票の結果左の通り當選した。

木村鍊戒 (庶務部)

吉田孝秀 (運動部)

田代榮正 (文學部)

矢野鍊明 (購買部)

田中慈石 (會計部)

三木淨途 (辯論部)

因みに會長は杉田院長親下で、副會長は高田教頭、庶務部長鹽田教授、辯論部長松木教授、會計部長丸山教授、文學部長渡邊教授、運動部長永倉教授、購買部長中條教授である。

四月三十日本學院講堂で昭和二年度の定期大會を舉行した、其の概況は左の通りである。

定刻八時三十分會員一同着席遠藤本勵君開會を述べ、副會長高田惠忍教授の命に依り議長に永倉師を推し直に議長席に着席。幹事の各部報告に次で、各部に對する質問より漸次議事の審議に入る、然れども午後三時三十分時間の切迫により停會を宣せらる。依て翌五月一日午後再び開會す、議事順調に進み舊幹事の辭任式並に新幹事の就任挨拶あり、次で新幹事の豫算案の發表あり異議なく通過。直ちに、緊急動議に入るも議論百出し再び停會を命ぜらる。越へて二十一日午後三回目の續會を開く。開會を宣してより斯に二十日、漸く愛會の至情堂内に充滿し何等の障壁何等の隔意もなく昭和二年度の定期大會は終り午後四時副會長高田教頭の閉會の辭に何れも喜悅滿面嬉々として散會した。

前年度までの幹事は、同窓會としての詳細な記事は事のある都度庶務を通じて文學部から身延教報に掲載してゐた。今度も逐次身延教報誌上に擧げた故に、茲には紙数の許さない邊もあるし、各部から別に報告も出るから今はたゞ骨目の概録に止めて置く。

毎年五月一、二、三の三日間は、甲府市の稻荷祭典を機縁と

して、佛耶兩教の法將は群がる民衆へ無上の寶珠を與へてゐる本會よりは松木辯論部長以下二名應援隊として出張した。

支那動亂の災を享けて、第三師團管下に屬する會員高等部二年生石黒湛全君は出征の命を受く、依て五月十一日午前十時樓神の法窟に於て其の報告式を擧ぐ、本會代表の式辭に次で皇國の爲に身命を抛つて君恩に報ゆるの答辭あり、本學院校旗を先頭に出征の途に就かれたり。

五月廿四日佛敎研究の爲來朝中なる獨逸神學博士テットーマルバツハ並瑞西國人カ、ワイザンゲルの兩氏來院、祖山學徒の爲に一場の感想講演あり、大いに得る處ありき。

長らく學院講師として、哲學方面の科目を擔當せられし八木友眞師は、第一學期限り敎職を退かれた、依て送別謝恩茶話會を大客殿に開催す、師の置きみやげたる哲學的精神は今後益々學院に成長することであらう。

前記の如く支那動亂に出征せる會員石黒湛全君は暴露三ヶ月天津の風に櫛り雨に浴したれども、茲に目出度凱旋せらる、依て九月五日午後、大客殿に於て祝賀茶話會を開催す。院長狹下御訓示に次で石黒君の出征中の所感演説あり盛大なりき。



## 辯論部だより

雄辯！ それは現代に活躍せんと欲するものゝ缺くべからざる最大要件である、況んや衆生敎化の使命に生きんとする吾等宗敎家に於てをや。

於茲乎本部の責の存する處、愈々重且大なるを痛感せずにはゐられぬ。

……時は流れる……時代は遷る……因習的な形式や菩薩した迷信の殻を脱ぎ捨て、眞の大白法を宣揚し、「宗祖が信仰の」徹底に大いに勇猛精進せねばならぬ。

然しそれには熱烈なる意氣を要し、忍耐を要し、而して吾等の武器とするものは、本より金力にあらず權力にあらず唯々不爛三寸の舌頭があるのみだ……。然り！ この舌頭こそ吾等に取立ては唯一の武器であり生命でなくてはならぬ。

今や宗敎の名、當に地に落ちんとするの悲運を見るは何が故ぞや。然り而して又これが挽回の重任を擔へるは誰ぞや。

おゝ奮起せよ！ 使命に生きんとするの若人。汝の奮起こそ實に刻下の急務である。而してこれが實現は、一に偉大なる辯論の力のみ能くする處である。

斯くして時代は辯論を強要する。吾等豈時代に逆ふを欲せんや。本部では毎週土曜の午後を割いて耕籍に當て、且、學期毎

に各級選出雄辯大會を開催して、大いに耕辯の實を揚げてゐるのみならず一昨年度よりは男女青年團身延中學及び吾祖山學院の四團體の聯合雄辯大會を開催するなど、着々向上の道程を辿りつつあるのである。

因みに本部の五月以後の情報を畧記せん。

甲府太田町公園の獅子吼 五月二日より三日四日に亘り松木部長、山口龍明君、武田海正君等公衆の前に長廣舌を振ふ。

釋尊降誕會を期して 五月七八日の兩夜は例年の通り身延上町辻に立ちて大獅子吼をなす。其の人は

七日 矢谷智秀君、瀧川顯照君、近藤惠聰君、武田海正君、吉

川啓善君、山口龍明君、清水教授

八日 横山泰歡君、三木淨達君、近藤惠聰君、渡邊正教君、松

木部長

開闢會の夕 六月十六日身延山三門に於て幻燈大會、更に十七日道路布教を上町辻に。

幻燈解説者は横山泰城君(中四)、樋口寛正君(中五)、近藤惠聰君(高一)、武田海正君(高一)、鹽嶋頭沾君(高三)、松木辯論部長

技士 岡本前能君(中四)

助手 工藤唯一君(中三)、福士泰量君(中三)

道路布教をした人々は、三木淨達君(中四)、田代榮正君(中五) 近藤惠聰君(高一)、武田海正君(高一)、渡邊正教君(高三)、松

木辯論部長

第一學期各級選出雄辯大會 六月廿七日迫る試験も顧みず熱

誠なる部員に依つて盛會裡に閉會す。プログラム左の如し。

閉會の辭

三木幹事

暗黒より光明へ

中一 梅溪英學君

日蓮上人を仰慕して

中二 中澤要實君

人生

中三 松井三一君

我等の辿るべき道

中四 横山泰城君

時代は斯く語る

中五 矢野鍊明君

世相を眺めて

高一 堀内義光君

東洋の平和と東洋人類の幸福は何處に

高二 方哲源君

近代文明の破綻と其歸結

高三 渡邊正教君

挨拶

部長 松木教授

閉會の辭

田代幹事

三光堂の説教

身延上之山三光堂の請に應じ、松木部長及び山

口龍明師出張す、

尙此の外山内布教、特別布教等々擧ぐれば多し、餘り煩に流

るゝ故畧す。(三木生)



## 運動部報

自分は歴うした事を平素耳にし又体験もする。それは自分が

より已上運動家である爲ではない。即ち「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」の語だ。而もそれが事實である事は誰も異議は無からう。と云ふて自分は無暗矢鱈、盲目的に運動を誇張するものでもない、只今普通しての大政治家、大企業家、偉人賢者の如きものは必ず健全なる精神を以て、各國家、社會に望んだものに相異なる。健全なる肉体の保持者こそ立派な精神の所有者だ。と云へば或者は「否々」と才士多病を力説するものがあるかも知れぬ、慥かにある。然しそれは一般的のもので無く只二、三の者を指すに過ぎぬ。而もそれが運動を餘り理解しない往時のものである事は言を待たない。今や社會の文化は言語に絶した大發展を示してゐる、而も運動そのものは人智の進歩と共に並行に進んで行く。蓋し文明の國程運動熱は旺盛である。而して運動家殊に吾等の如き學生スポーツマンは運動の佳なる事を知るに同時に「過度」の二字を知らなくてはならぬ。過度とは云ふ迄も無く度を過す事で、其爲學年末におもはしからぬ結果になつたり、又過度の運動の結果は思はぬ病に襲はれ身体を害する事も多くある。壓うした人々には未だ充分に過度の二字が味はれてゐない。

要するに吾等學生は勉強の餘暇、而も其の運動時間を決めるに云ふ事は健全なる精神を宿す上に於て最も必要である。

茲二、三年の中に祖山にも壓うした運動の理解者が續々出て熱心なる運動家が著るしく増加した事は將來より良き社會建設の爲め日蓮主義を喧傳し、從來の惡思想を一掃する使命を帯び

た祖山二百の學徒には喜ばしき事でなくてはならぬ。而も其運動競技に於ては各部共發達の域に向ひつゝある事は勿論である春秋二季の大會には今更ら乍ら驚嘆せざるを禁じ得ないシーンもある。

吾が通動部はA、庭球部。B、劍道部。C、弓術部の三部より成つてゐる。今左に部分けして簡単に説明を加ふれば、

A、庭球部 當部は約三、四十名の所謂テニスマンがあり随分盛大である。悲しい事にニートが一ヶ所丈けしかないので往々練習者の意に添はぬ事は残念だ。此の六月初旬に甲府市より奥山治義氏一行が來詣し、そして練習して下さつた事は感謝に絶へむ、時々壓うした外部よりの刺激もあるので嬉しい。

B、劍道部 當部は是れ又四十名の會員を有し一昨年二段加藤君の去るに及んで一時落歎してゐたが、最近筒井君を迎へ清瀬、大橋、松永の諸君一級に、二級に三名、三級に三名、四級に六名、五級に四名、六級に三名、七級に六名の昇級者を本年春季大會の際出し、猛者は逐次排出するであらう。當部に於て最も感謝すべき事は身延小學校の次席訓導三段小野正夫氏の熱心なる御教導である、祖山の劍道は同氏に依り中興せられたと云ふても恐らく過言で無からう、新校舎建設と共に道場が出来た事は一層の盛況を示す事であらう。

C、弓術部 當部は今僅か十名の會員に過ぎないが未だ學生の多くが充分此部に對して理解がないらしい。然し中には遠藤君、吉川君、黒崎君の如き目錄已上の人々もある、運動場の狹

い爲め練習場の造られない事は遺憾に思ふ、其内良い地所を見付け完全な射的場を作り、他の二部に遜色無き發展を期そう。最後に自分は此の稿を終るに當り、特に吾校庭球部獎勵の爲め、甲府市和田平町奥山治義氏のボール一箱寄贈せられし事を衷心より謝禮す。

運動せざるものは隋性に陥り安く、心に眞の快樂、要するに天真爛漫たる事無くして常に幽鬱性となる、規律正しき運動は前述の如く心身を壯健にする。宜敷從來の否運動家は競ふて各部の何れにでも入會せられ、以て活潑に、以て意氣ある生活となし人生の幸福を得られん事を切望す。(吉田生)



## 文學部報

時代は刻一刻に進轉し、文化の發展科學の進歩、その歸趣する所を知らない。歐米の文物を入れて後の日本、世界の向上諸機關の發明には驚くの外ない、これらあらゆる諸機關の發達は實に人生をして平等に幸福に、自由に惠ませたいのが本義である。少くとも御互人類をして幸福ならしめんが爲に、整ひ造られつ行きつあるのである。

然らばこれらによつて果して人類が眞の幸福たり得るか！そは拙筆にセイ言するまでもないほど亂用され一面反比例し世

を擧げて混亂、亂世遂いに國家を根底より覆さんとする主義へ益々深刻に且堅實に、而も津々浦々に浸入した。

今にして思想善導せずんば、さは政府の資を投じて設けつゝある所以である。然らばこれによつて眞に善導し得るか、と眺める時吾々の責任の如何に重大であるかと窺れる。と同時に思想の惡化は吾々の罪であるを謂ひ得る。明治維新のあの大業も國体眞に絶叫された人によつて遂に遂げられた。詳の歴史の時代も又然りである。斯く思ふと如何に社會思想の充分なる研究、彼らに對する勇猛精進の研究が必要であるか！眞摯なる研究が必要であると同時に、佛教釋尊の根本精神を以つて國民思想吾人類思想の根底とすべしと絶叫した、日蓮上人の教へを理解させ信仰させる我々若人の双肩の責任の甚大さが胸にヒシく迫る。

茲に於て長らく中止の棲神を發刊し御互の意見を發表し、交換し諸君の努力を希ふ次第です。終りに校正の不備編輯の不振となんとも深謝すると同時に、左記書籍雜誌御贈與下されし諸氏に厚く感謝する次第である。

社會事業研究	岡	島	伊	八	殿
大阪毎日新聞	全				
天業民報	天	業	民	報	社
身延教報	身	延	教	報	社
立	正	社	殿		
覺	醒	園	殿		

傳導 團の光 信友月報 あさひ 立正教報 奉仕 日本文化 大統 斯民 教 宙 立正新聞 宗報 明治 人道 端評新聞 瑞雲

以上

會友 學院生

大阪傳導社殿 京城團教社殿 名古屋信友會殿 大阪あさひ社殿 神戸立正社殿 佛教奉仕社殿 里見研究所殿 東京大統社殿 中央報德會殿 教發行所殿 岩城立明君 近藤惠聰君 宗務院殿 天業民報社殿 人道社殿 瑞雲社殿 村雲婦人會本部殿 (田代生)



<p>昭和三年十一月十五日印刷 昭和三年十一月二十日發行</p>	<p>編輯人 山梨縣身延村 渡邊 日龍</p> <p>發行人 山梨縣身延村 田代 榮正</p> <p>印刷人 甲府市柳町七十四番地 青柳 詢一郎</p> <p>印刷所 甲府市柳町七十四番地 芳文堂印刷所</p>	<p>發行所 山梨縣南巨摩郡身延山久遠寺 祖山學院同窓會文學部</p>
--------------------------------------	---	-------------------------------------